

# ”オットソン”と呼ばれた日本漂流民

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

---

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Hosei journal of sociology and social sciences / 社会志林

(巻 / Volume)

51

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

244

(終了ページ / End Page)

165

(発行年 / Year)

2004-07

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021015>

## “オットソン”と呼ばれた日本漂流民

宮 永 孝

江戸時代、和船は帆をかけ沿岸を見ながら走ったのであるが、ひとたび時化<sup>しけ</sup>や暴風雨に遭うとひとたまりもなく難船し、海底のものと消えるか、運よく異国に流れついて、助かるかのいずれかであった。

幸い外国に漂着しても、そこで日本人を待ち構えていたのは、数々の艱難辛苦であった。人生に運、不運はつきものだが、幸運にめぐまれた者は、漂流のすえ、まれに帰国することができたし、中には通弁となって世間に出、人に知られるようになった者もいる。

一方、漂着後、異国をさすらい、幾度か日本本土に接近したにもかかわらず、幕吏から上陸を拒否されたり、死の恐怖から帰国を断念し、以後じぶんと同じ身の上にある漂流民に援助の手を差しのべ、母国に帰還させることに生き甲斐を感じ、またごくまれに出会う同胞に欣喜雀躍し、懐旧の涙を流す者もいた。

この稿の主人公——尾州の音吉（別名・オットソン）——は、まさにそういった人間であり、かれは望郷の念にかられながら、異国でひとり淋しく逝った日本漂流民の典型であった。

本稿は、天保三年（一八三二）十一月、紀州から江戸にむかう途中難船した、尾張の「宝順丸」の遭難の顛末から、生存者三名の末路について、新史料にもとづいて描いたものである。また末尾には、ロンドンの公文書館が蔵する宝順丸の三漂流民に関する史料をそえた。

イギリス軍艦マリナー号で浦  
賀に来た<sup>リンアト</sup>林阿多<sup>リンアト</sup>。こと漂流  
民・音吉。

塩田恭順庵編纂『海防彙  
議補 十』（国立公文書  
館蔵）にみられる挿絵を  
筆者がスケッチしたもの。



——小野浦<sup>おのうら</sup>「現・美浜町」の樋口源之所有の帆船、千五百石積<sup>(1)</sup>は、いまの名古屋港を出帆して江戸へむかった。しかし、船は港を出  
てまもなく、時化<sup>しげ</sup>にあったので、志摩の鳥羽に入港して、天候がよくなるのを待った。

宝順丸の乗組員（十四名）は、つぎの面々である。

船頭……………重右衛門（源六のせがれ）

水夫……………仁右衛門

利七（金右衛門のせがれ）

三四郎

常治郎（弥右衛門のせがれ）

\*

紀伊半島の東端に位置し、天然の良港として古くから栄  
えたのは、

「鳥羽浦<sup>とばうら</sup>（湾）」

であった。鳥羽浦には大小の島々が点在し、それが天然の  
防波堤の役目を果たしていた。

江戸時代、江戸と大坂間の航路がひらけると、船の出入  
りも多くなった。何よりも「風待ち港」（避難港）として  
その名が知られるようになった。

天保三年十一月二十日（一八三二・一二・一一）、尾張

藩の廻米その他の品々を積んだ「宝順丸」（知多半島南部

六右衛門

吉治郎 (小野浦の出身、武右衛門の長男)

乙吉<sup>⑧</sup> (小野浦の出身、武右衛門の次男、のち「オットソン」と呼ばれた)

久吉 (小野浦の出身、又平のせがれ)

政吉 (小野浦のとなり野間村出身)

岩吉 (熱田宮の出身)

仙之助<sup>⑨</sup> (伊勢若松の出身)

勝五郎 (新ヶ居浜の出身)

辰蔵 (伊勢波切の出身)

宝順丸は鳥羽浦 (三重県東端の港町) で十二日間も天候の回復を待ち、のち出帆したが、ほどなく暴風雨にあい、帆柱やかじを失った。

やがて陸地を失ない、船の位置もわからなくなり、すっかり進路を見失ってしまった。このときから漂流がはじまったのである。漂流の顛末については、生き残った三名が、後年マカオにおいて宣教師ギュッラフに語った談話に詳しい。

漂流すること十四ヵ月、船は翌天保四年十月か十一月 (一八三三・一一、一二) ごろ、現在のワシントン州オリンピック半島の北西突端——フラッタリ岬のあたりに流れ着いた。<sup>④</sup>

漂流中は、積荷の米と雨水で露命をつなぐことができたが、十四名いた乗組員のうち十一名までが壊血病によって命を失ない、生存者は

乙音<sup>⑩</sup> (当時十六歳ぐらい)

久吉 (当時十七歳ぐらい)

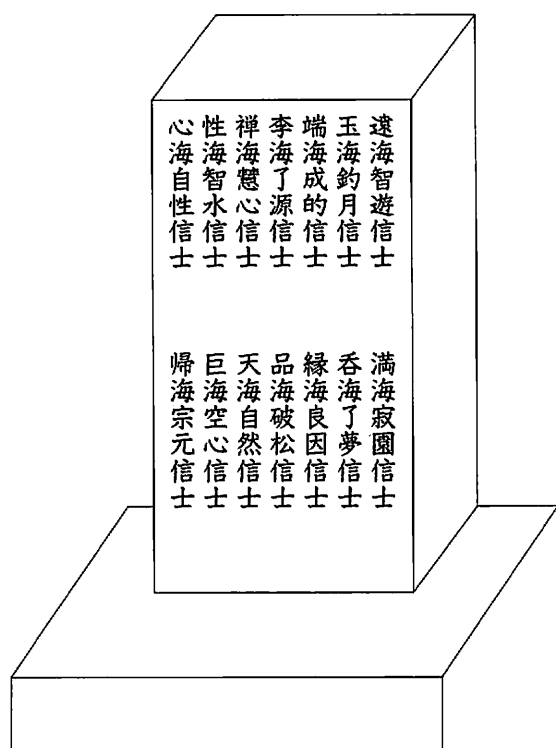
岩吉（当時、三十歳ぐらい、郷里「熱田宮」に妻と家族がいた）

だけとなった。

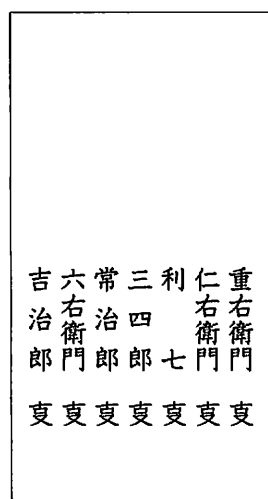
宝順丸が鳥羽浦を出帆してから消息はすっかり絶えてしまったので、きっと遭難したものと信じられ、小野浦では乗組員たちのめいふくを祈るために墓碑が建てられた。小野浦（町）の禪林山良参寺（曹洞宗）の本堂脇の小さい墓地に、宝順丸乗組員の菩提をとむらう墓がある。

墓石の四面に遭難者の戒名や氏名などが刻まれているが、中には文字が磨滅し読めなくなっているものもある。刻字は早晚すりへって、判読できなくなるものと思われる。

〔正面〕



〔正面に向って右側〕



[裏面]

天保三年壬辰十月十一日

志州鳥羽浦出帆

宝須丸重右衛門船

[正面に向って左側]

辰	勝	仙	岩	政	久	乙
	五	之				
藏	郎	助	吉	吉	吉	吉
亥	亥	亥	亥	亥	亥	亥

注・亥は古字、事におなじ。

宝順丸の乗組員の家族らは、八方手をつくして同船の消息を得ることに努めたことと思われるが、その行方をつきとめることができず、年が改った天保四年に供養の墓をつくったものらしい。

ともあれ三名の生存者は漂着後、インディアンによって捕えられると、その部落へ連れてゆかれ、やがて奴隷同然に使役された。七カ月ほど経ったところ、三人は年に一、二度、獣皮類の取引のためにインディアンの居住地にやってくるハドソン湾会社（ペイ）の商船ラーマ号の船長ウィリアム・マックネルによって発見され、同人の尽力で買い取られ、ついに救出された。

三人は、ブリッグ型帆船ラーマ号に乗ると、コロンビア川を遡行し、ハドソン湾会社の毛皮工場へむかった。そこで四カ月ほど親切な扱いを受けたのち、フォート・ヴァンクーバー（現・オレゴン州ポートランドの近く）の町に連れてゆかれ、同社の太平洋岸総責任者ジョン・マクローリン博士の保護下におかれた。時に天保五年八月（一八三四・九）ごろのことであった。

やがて同年十一月ごろ（一八三四・一二）、三人の漂流民は必要なものを与えられたのち、フォート・ヴァンクーバーからブリッグ型帆船「イーグル」号（ダービー船長）に乗せられ、ロンドンにむかった。従来の研究では、同船がサンドウィッチ諸島（現・ハワイ諸島）に寄港し、南アメリカのケープ・ホーンを経てイギリスにむかい、ロンドンには一八三六年六月（洋暦）に到着した、となっている。

三名の日本人を乗せたイーグル号のロンドン到着の時刻に関しては、諸説がある。たとえば、つぎに掲げるものがそれである。

「それは一八三五年の夏のことである」(奥平武彦「英国政府と日本漂流民」)

「其処からハワイ及びケープ・ホーンを経て英国へ送られ、一八三五年六月ロンドンへ着いた」(相原良一『天保八年 米船モリソン号渡来の研究』)

「さらに三名は、そこからハワイ及びケープ・ホーンを経てイギリスへ送られ、一八三五年六月ロンドンに着いた」(川合彦充「モリソン号の来航と日本人漂流者」『海員』所収)。

「……ケープ・ホーン経由で翌一八三五年六月にロンドンに着いた」(春名徹『にっぽん音吉漂流記』)

「イーグル号がサンドウィッチ諸島に寄港し、ホーン岬を廻ってイギリスに着いたのは、一八三五年六月である」(酒井正子訳著『最初にアメリカを見た日本人』)

注・傍点は引用者による。

イギリスの夏といえば、ふつう六月から八月ごろまでをいうのだが、いま引いた五人の説は、ほぼ同じであり、イーグル号のロンドン着を一八三五年の夏(六月)としている。ところが、一八三五年六月にロンドンに入港した船の中には、イーグル号の名が見当たらないのである。

『ザ・タイムズ』紙(いわゆる『ロンドンタイムズ』、一七八八年からThe Timesとなる)の「船舶ニュース」(Ship News)の欄には、ロンドン港に出入りした船の情報がひんばんに掲載されているが、一八三五年六月に、同港にイーグル号が入港した形跡はいっさいないのである。

ところが前月、すなわち一八三五年五月の「船舶ニュース」をみると、イーグル号の名が何度か姿をみせるのである。たとえば、つぎに引くものがそれである。

モーリシャス（インド洋南西部、マダカスカル島東方の島——引用者）からやって来たイーグル号は、二月二十三日喜望峰に到着（一八三五・五・七付）。

モーリシャスを出帆したイーグル号は、ダウンス（ケント州東海岸沖の錨地——引用者）に到着した。同船はモーリシャス島を二月五日に出帆した（一八三五・五・一三付）。

税関の構内に入った船。五月十三日。（前文略）モーリシャスや喜望峰からやって来たイーグル号。……（一八三五・五・一四付）。

荷積みのために港を離れる——イーグル号、喜望峰やモーリシャスへむかう（一八三五・五・二八付）。

いま引用したイーグル号は、三人の日本漂流民を乗せた船である可能性が高い。が、もしそうだとすると、ここで一つ矛盾が生じるのである。従来の研究では、三人の漂流者はロンドンより、ハドソン湾会社所属のジェネラル・パーマー号に乘せられ、喜望峰を経て、マカオへ送致され、一八三五年十二月（天保六年十月）に同地に着いたとされているからである。

漂流民らはマカオ到着後、ギュッラフ師から事情聴取をうけたとき、ロンドンで乗船した船名について何も語っておらず、マカオに近い伶<sup>リン・アイ・エン</sup>竹島ちかくの錨地に到着するまで約半年の航海であったとだけ語っている。かれらはおそらくイーグル号でロンドンを出帆したのち、どこかの寄港先でジェネラル・パーマー号に移乗させられ、そのままマカオに連れて来られたものであろう。

サンドウィッチ諸島に寄り、ケーブホーンを廻ったあとのイーグル号の航路については、資料に欠けるため明らかでない。

先に引用したイーグル号が、三人の日本人を乗せた船と同一であるとする、同船の航跡がはっきりしてくるのは、それがインド洋に入り、モーリシャス島（イギリス領）に到着してからである。その後、イーグル号はおそらくケーブタウンに寄ったのち、喜望峰をへて大西洋に入ると北上をつづけ、セントヘレナ島、ベルデ岬諸島、マデイラ諸島の各港に寄港しながら、徐々にイギリスに近づいた



ものであろう。

そして南イングランドのダウンス (Downs) の錨地を経て、テムズ川をさかのぼり、ロンドンの税関前あたりに到着したのは、一八三五年五月十三日 (天保六年四月十六日) のことであつたと考えられる。

従来の説では、イーグル号のロンドン到着の時日に関する記事は、信ぴょう性が高いようにおもえる。イーグル号のロンドン到着の時日に関する記事は、信ぴょう性が高いようにおもえる。

三人の日本人が訪れた当時のイギリスは、ホイッグ党のメルバーン内閣 (一八三四、三五、四一年) の時代であつた。日本では天保の大飢饉 (一八三二、三三) の最中であり、二年後に大坂で大塩平八郎の乱がおこっている (一八三七)。ともあれイギリスでは、新しい政府のもとで社会改革がすすぎとおこなわれ、中でも最大の改革は、イギリスの国制にかかわる第一次選挙法改正 (一八三二年) と救民法の改正 (一八三四年) であつた。<sup>(6)</sup>

一八三〇年代から五〇年代は、イギリスが農業国から工業国に脱皮しはじめたころであり、首都ロンドンの人口は約二〇〇万、リヴァプール、マンチェスター、バーミンガム、グラスゴーなども人口十萬の都市へと躍進していた。鉄道建設ブームの波にのって営業線が各地に伸び、一八五一年にはブリテン島の鉄道は一万キロを突破した。<sup>(7)</sup>

また一八三〇年代は、新興中産階級に対立する一つの社会階級として、労働者層が形成され、後者の政治を改革するための熱狂的な組合運動 (チャールティスト運動) は、一八三六年の不況の到来とともに活発化した。<sup>(8)</sup>

一方、三人の日本人が身を置いたロンドン港 (the Port of London) は、どのような所であつたのだろうか。ロンドン港は、テムズ川を港として使つていたものであり、とくにテムズ川はロンドンの交通や輸送の大動脈であつた。<sup>(9)</sup>

十二、三世紀にかけて造られたロンドン橋<sup>ブリッジ</sup> (外敵を防ぐための城壁の役目を荷なつていた) のアーチ型の橋脚は、大型船の航行をはばんでいたもので、この橋から上流方面は港として栄えず、自然下流にむかつて発展する一因ともなつた。<sup>(10)</sup>

古来、多くの船舶はロンドン橋の下流の水域に碇泊すると、積荷ははしけによって岸に揚げおろしされていた。ロンドン税関は、はじめから船舶が川すじの中流に錨をおろし、碇泊することを許していたので、人や積荷の移送にはしけが必要であつた。

法律によって定められた、外国貿易の船着き場<sup>(1)</sup>として、つぎの二つがあった。

法律上の埠頭 リーガル・ヘイ  
サファリンス・ホイフ legal quay (ロンドン橋から税関前を通り、ロンドン塔までの一四一九フィートの地区)  
黙許埠頭 サファリンス・ホイフ sufferance wharf (ロンドン塔の北岸から七八六フィート、および税関やロンドン塔の対岸二八九一フィートの地区)

イーグル号の積荷(毛皮)は、関税徴収の対象であったから、当然法律上の埠頭——ロンドン橋とロンドン塔までの水域のどこかに碇泊せねばならなかったはずである。

十八世紀末までの回漕業は、テムズ河岸につくられた波止場や、はしけなどを使って、川中の係船所などで、行なわれるのがふつうであった。けれど盗難事件の多発などにより、十九世紀に入ると、河岸を切り開いて囲いで仕切ったドックが建設されるようになった。<sup>(2)</sup>

イーグル号が碇泊したと考えられる税関前の埠頭には、さまざまな商船が係留され、積荷の上げ下ろしがおこなわれ、喧騒をきわめていた。三人の日本人は、毎日、十日ほどの間(じっさいは約二週間?)甲板のうえから行き交う船や四方の風景に見入ったことであろう。税関にむかって右隣りにあるのは、有名なロンドン塔、そして税関の左側の先に見えるのはロンドン橋、そのずっと先には丸屋根の聖ポール寺院がみえ、対岸の大小の倉庫群の中に、聖セイヴィア教会やロンドン橋駅などの建物を見たかも知れない。しかし、三人には各建物の名称までは分らなかったであろう。かれらは一日だけ上陸を許され、案内人とともに都見物をしたという。が、いったいどこを訪れたものか明らかでない。

おそらくかれらは、徒歩か乗合もしくは貸切りの辻馬車でロンドン市街を見物したと考えられるが、何も語り残していないのは誠に遺憾である。乗合馬車がロンドンに出現したのは一八二九年とのことであるが、運賃はふつうの事務員や肉体労働者が払う余裕のない金額であったという。<sup>(3)</sup>ともあれこの三人こそ最初にロンドンを訪れた日本人としての栄誉をになった。

三名の日本人は、五月十三日(洋暦)にロンドンに着き、同月二十八日(洋暦)に出帆するまでの約二週間、ほとんど船中で暮らし



*Karl Gutzlaff*  
*Ch. Gutzlaff*

カール・ギュッツラフ師の肖像写真とその署名。  
Rev. Charles Gutzlaff: A Sketch of Chinese History, Ancient and Modern, John P. Haven, New York, vol. I, 1834 より。

師（一八〇三〜五一）に身柄を預けた。

当時、マカオには次官キャプテン・エリオットが在勤しており、同人はみずから三人を取調べた。かれはクルーゼンシュテルンの日本地図をみせると、三人は名古屋と江戸との沿岸を正確にたどってみせたので、日本人であると確信した。<sup>(15)</sup>

エリオットは一八三五年十二月二十五日付をもって長文の覚書を書き、それをロビンソン卿に提出し、インド総督に送達するよう乞うた。<sup>(16)</sup> 同書簡の内容は、——三人の漂流民たちは帰国を熱望していること。外国船でかれらを日本へ送還するとその身に危険がおよぶ怖れがあること。送還は慎重かつ友好的に行なうべきであり、イギリス艦を使うのがよく、来年の四月下旬に軍艦一隻をマカオに送るよう要請した。

年が明けて一八三六年一月十四日、ロビンソン卿はギュッツラフとモリソンに宛てて書簡を送り、三人の本当の気持を聞き出すようにいつている。すなわち、——三人の日本人は、帰国に際して危険を疑っているか。イギリス軍艦で送還されることを望むのであれば、本年四月まで待てるか。これらの点を日本人たちに尋ね、かれらの回答を文面にし、かつ貴下の意見も添えて送って欲しい、と。<sup>(18)</sup>

この書簡に対して、翌一月十五日に早くも両中国語通訳官の名で、つぎのように回答している（「資料 一」を見よ）。

——三人の日本人は、いままずにも帰国したい希望をもっていること。中国船で帰るより、イギリス船で帰国したいこと。船の種類に

たことになる。イーグル号は三人の日本人を乗せたまま、一八三五年五月二十八日（天保六・五・二）ロンドン港を出帆し、東洋への長途の旅にたち、航海の途中でかれらはジェネラル・パーマー号に移乗させられ、約半年後の同年十二月のはじめ、マカオの錨地伶仃島付近に到着した。<sup>(17)</sup>

ジェネラル・パーマー号の船長のダウンスは、日本人を駐華イギリス商務庁の長官ジョージ・ベスト・ロビンソン卿に引きわたし、日本へ送還するよう求めた。よってロビンソンは、かれらをマカオに送り、商務庁の中国語の通訳官をつとめるカール・フリドリヒ・オーガスタス・ギュッツラフ

ついでには選ぶことができない、といい、両人の私的な意見として、日本人を本国に送還する際のもっともふさわしい手段は、イギリス軍艦であるとし、指揮官（艦長）は、日本人をイギリスの保護下に置いていた旨をしたためた、インド総督またはその他の政府高官の書簡を携帯すべきであるとしている。

ロビンソン卿の要請書にたいして、両通訳官は「資料 二」に見るような三人の漂流民がしたためた日本文と英訳、さらには日本文の読み方をローマ字にしたものを添えたのである。

#### 日本

天保三辰年十月十一日志州鳥羽浦湊出

尾州尾張國會賤（回船の誤り―引用者）宝順丸重右衛門松拾四人乗

岩吉久吉乙吉徒人ノ（唐人―の誤り）御船ニをどろくな日本ゑはいける

イワキチ

休吉

音吉

注・原文の右肩には、カタカナで読み仮名がふつてある。

この文章の英訳を検討してみると、原意との大きなずれがある。日本文のさいごの一行「……岩吉久吉乙吉……」は、原文の意では、「エワキチ、オトキチ、キュキチらは……イギリスの軍艦に乗って日本へ行くことをすこしも怖れていない」となっているからである。ともあれ三人の日本漂流民らの、帰国にはやるあどけない心情を如実に伝えているのが、「徒（唐）人ノ御船（ジャンクのこと―引用者）ニをどろくな、日本ゑはいける」の一行である。

マカオにおける日本漂流民。

一八三五年十二月はじめに伶<sup>リン</sup>仵<sup>テイン</sup>島付近の錨地に着いた三人の日本人は、その後ジャンクに移され、導かれるままにポルトガル領澳門<sup>マカオ</sup>（Macao）に連れてゆかれ、そこに上陸した。ちなみに伶仵島は花崗岩質の不毛の地であり、投錨地がみえる島の西側に小さな貧しい集落があった<sup>(19)</sup>。伶仵湾は水深があり、停泊地として古くから知られていたばかりか、アヘンの密貿易の中心でもあった。マカオ

は中国領から長さ約四キロ、幅約二キロほどの半島であり、十六世紀のころからポルトガル人が住みつくようになり、船の出入りが盛んになるにつれて、各国の通商代表部が置かれるようになった。

三人の日本人はマカオに上陸後、ギュッラフの住居に連れてゆかれたが、その家は、白鴿巢公園<sup>バカチヤウコウイン</sup>（別名カモエンス公園）の近くにあったらしい。<sup>(20)</sup> ということは内港に面した見晴らしのよい高台にあったということである。

マカオとは、どのような土地であったのであろうか。マカオの緯度<sup>(21)</sup>は、北緯二十二度三十分、東経十一度三十二分である。マカオ半島は花崗石質の土地であり、付近には大小の島がいくつか点在している。気候は熱帯性であり、三月から四月にかけて東北の湿った風が吹く。五月から九月までは暑く、夕方にスコールがふる。九月から十月までが秋にあたり、晴天がつづき、東北の風が冷たくなると冬が訪れたことになる。冬こそマカオではいちばんしのぎやすい季節なのである。<sup>(22)</sup>

マカオは三つの地区もしくは教区に分けられていた。街路は狭く、勾配をなし、不ぞろいであった。香港島とおなじように石の階段<sup>(23)</sup>があった。

家は石またはレンガで造られていたが、外観はあまり立派とはいえなかった。けれど屋内は広々としていて、生活に便利であった。当時、マカオには商店や大小の市場があり、皆そこで買物をした。

この丘の多い植民地の平地には、商人や職工のための市や商店がみられた。また海を臨む高台の勾配に目をやると、公共や私的な建造物、教会、修道院などが立ちならんでいた。半円形の内港から上陸すると、左手の丘にペーニャ教会、右手には大小の人家にまじって総督官邸、アルヴァレス像などがあり、また幅の広い「プラヤ・グランデ」と呼ばれる波止場がある。この大通り沿いにイギリス人や商人たちが住んでいた。

一八三〇年当時のマカオの人口について述べると、軍人や僧侶をのぞいた数が四六二八名である。

白人の男性……二二四九人

白人の女性……三五〇人

男の奴隸……三五〇人

女の奴隸……七七九人

一八三四年当時、マカオで暮らすポルトガル人は、九〇名ほどであった。<sup>(24)</sup>

人口は、時代によってだいぶ推移するが、十七世紀の住民の数は約十九万五千人であつたらしい。それが一八三〇年代になると約四千人にまで減った。中国人の数は、船の上でくらす水上生活者をふくめて、約三万人であつた。

マカオはかつて東洋の通商を独占し、大いに貿易で潤ったが、十九世紀初頭、貿易は“名ばかりのもの”と化していった。<sup>(25)</sup>しかし、アヘンの密輸だけは盛んであり、のち中国人に個人的に高く売りつけて利益をあげた。一八三〇年代通商はふるわず、多くの中国人は仕事をまとめてマカオを離れた。<sup>(27)</sup>景気停滞は一八五〇年代に入っても衰退をつづけ、ペリーの日本遠征艦隊が寄港するころは、“昔のマカオの幽霊”<sup>(28)</sup>にすぎず、通商はほとんど行なわれてはいなかった。港は寂れ、町は閑散としていた。初代アメリカ領事ハリスの秘書兼通訳ヒュースケンは、日本へ赴任する途次、一日マカオに遊んだが、その印象は「墓」<sup>(30)</sup>以外の何ものでもなかった。<sup>(29)</sup>

ともあれ、三人の日本人にとって、海から見るマカオの町の外観はすばらしいものであつたに違いない。港のちかくにある小丘の勾配には、ポルトガルの習慣にならって白亜の家がみられ、<sup>(31)</sup>町中に入り迂回路をゆっくり歩くのも心地よかったはずである。

街中にはとくに乗り物といったものはなく、<sup>(32)</sup>あえてそれにちかいものは、二人でかつぐ肩輿であつた。またマカオの港は、泥地の遠浅であるため、大きな船に適さず、大船は数マイル沖の錨地に碇泊した。マカオの商業活動は停滞していたが、海面に大小の中国の船がいたるところに見られ活気づいていた。

日本漂流民の目に写ったマカオの地勢、町並み、港などは、およそつぎのようなものであつた。つぎに引くものは、西洋人の描写したスケッチとはちがった趣がある。

寛政七年（一七九五）五月、奥州仙台の水夫源三郎<sup>かこ</sup>らは、いまのベトナムへ漂着し、のちマカオへ送られ、さらにマカオから広東へ送致された。そのときかれらがマカオで見聞した土地の形態、住居、食物などの様子を引いてみよう。

○ 地形之事 此地ハ離レ島ニテ 土色赤ク海ハトヲアサナリ 国王モ専ラ交易ノミヲ業トスルヨシ 一村ノ内 老若男女皆マツカラ人ノミ  
住居シテ 安南(ベトナム中部—引用者) フノ外 近国ノ人ヲツレ来リ 奴婢(召使—引用者) トスル  
ヨシ其一村ノ外ハミナ 広東人住居スル 山ノ上ニ城(モンテの砦—引用者) ノヤウニ構ヘ石門アリ 番人十人許リ鎗鉄炮(槍や鉄砲—引用  
者) ヲ持 笠ヲ被リ並ヒ居 中門ヲ通り上段ニモ門アリ

○ 宮室(家屋—引用者) 之事 居宅ハミナ至テ美麗ヲ尽シ 市店モミナニ階造リ 尾□柱ハ石尾ニテ□子立テ板茅ノ屋根 木ノ柱ハ見ルコ  
トナシ 天井ハナク 屋根ノ四方ニ板ヲ附ケテ架コトシ(家屋—引用者) 壁ハ石尾等マテ筑キ 内ニハ 石炭ヲ塗ル 畳ハナシ板ヲ張り 或  
ハ土間ニ腰掛ケヲ設ケ 又毛氈(じゅうたん—引用者) ヲ敷ク 障子ハ貝殻ニテ張り 敷居鴨居モアリ 此方(日本—引用者) ノ如シ 門戸ハ  
白塗リ扉ニテ 両方ヘ開ク

○ 飲食之事 カホウ宅ニテ ニンニクノ粥又小麦□ヲ喫セシコトアリ 魚ハ鯉鰯 菜ハ青菜ニラ ニンニク 三葉(みつばぜり—引用者)  
芥大根 茄子 ナタマメ 芋瓜カホチヤ等 肉ハ鶏 家猪(ぶた—引用者) 家鴨 菱(水草—引用者) □等 飲ハ 酒 茶 酢醬油 味噌ア  
リ 茶ハ上品 酢ハ甘キカタ 醬油ハ此方ノ味ニ異ルコトナシ味噌ハ醬油ノ様ナル味ニテ……

(亞媽港紀略稿 完)<sup>(33)</sup>より)

つぎに引くのは、土地ならびに港、町なみ、家屋、市舶(商売をする船) などについての描写である。

もっともこの近辺より、汐も濁り海泥地の遠浅にて、船寄りがたく、沖に繋り、十一日の朝、送り参り候役々ともども、テンマ(伝馬船)は  
しけぶね—引用者) にて上陸いたし候、

ここは入海(陸地に入りこんだ海—引用者) にて 三方山にてもっともわけて高山は相見え申さず、見馴れざる樹木茂り候所も、茅ばかり茂  
り候所も相見え、田畑は見かけ申さず、海辺は平地にて小一里四方もこれあるべき所 人家建ち並び、家造りは瓦屋根にて、たいてい二階作り  
にいたし、窓は硝子(ガラス—引用者) にて張り候 硝子を建て候所もこれあり、

下家は土間或いは板敷の所も相見え、軒並の町屋にて、その内には門構えの家も相見え、繁華に相見え、町家には反物類小間物その外 米・  
野菜・魚類・焼物類・酒等高い候、廓(遊女屋—引用者) 数多くこれあり、



*S. Wells Williams*

サミュエル・ウェールズ・ウィリアムズ師  
S. W. Williams: *The Life and Letters of Samuel Wells Williams, LL. D. Missionary, Diplomatist, Sinologue*, G. P. Putnam's Sons, New York & London, 1889  
より。

浜辺には大小船数多く繋り、漁船と相見え候百石積位の船も数多くこれあり、大小帆柱二本立てにて白木造りの船多く、ロソン（ルソンー引用者）の船と相見え帆柱三本立てにて、黒く塗り候船もこれあり  
その中には、水際より底の方は銅にて包み、窓を硝子にて張り、いろいろに彩色いたし、舳さきには人形を付け、帆柱三本立て候大船、その外唐船又は見馴れざる船数多繋り、専ら国々通商いたし候と見請け申候。

〔神力丸馬円漂流口書〕より

右奥門之海岸へ上陸いたし、水主躰之者同道いたし、浜辺より人家続き凡三千軒程も有之候

一、此所之家造り、瓦屋根ニ而二階作り、板間又者布瓦の間も有之、壁ハ白壁、又は板張の間も有之。

一、店ニ積立有之候品ハ、商ひ物之様子ニ而、唐人躰之者と売買致し候様子ニ見請申候。

〔栄寿丸漂流口書〕より

さてマカオにおける三人の日本漂流民の暮らしぶりであるが、資料に欠けるためにくわしいことはわからない。かれらはギョッラフ師の家で衣食に窮することはなかったであろう。ギョッラフは三人の日本人がわが家に身を寄せたのを幸いとし、かれらを教師として日本語研究と聖書の和訳に着手するのである。

ギョッラフ宅には、中国人の秘書兼通訳がいたようであり、ギョッラフは日本語を学習するさいにその助けを借りたとも考えられるが、日本人が来て一カ月ほどの間に、日本語は長足の進歩をとげるのである。

三人の日本人がマカオに来て半年ちかくに経った一八三六年六月二十五日、サミュエル・ウェールズ・ウィリアムズ師は、日本漂流民と知り合いになり、やがて身の上話を聞きたいきさつを記している。



一八三六年六月二十五日——いまギュッラフ氏の家に日本人が三名おります。かれらはコロンビア川（カナダのブリティッシュ・コロンビア州南東部からアメリカのワシントン州を通じて太平洋に注ぐ——引用者）からロンドンを経て、当地に連れてこられた者たちです。

目下、かれらはイギリス委員会の費用で養われています。三人のうち一名は、Keotich（休吉）といいますが、きょうわたしの所に使いに来ました。わたしはその者がかたことの英語が話せることを知ったので、思いつくまゐるいろいろ質問しました。

相手の話によると、江戸から五〇マイルほどの小さい町の出身だということです。（中国の里は、おそらく三分の一マイルでしょう）。その町はSwasiと呼ばれていますが、たぶん米を生産し、それを首都の江戸へ売りさばいている小さな港町なのでしょう。その者と仲間は、ぜんぶで四十名（十四名の誤り——引用者）になりますが、帆船（ジャック）に乗りSwasiを出帆しました。

五日以内に江戸に着くと思っていました。沖に吹き流され、もどることができませんでした。その船は大きくはなく、米を積んでおりました。その者の説明によると、漂流すること約四十ヶ月（十四ヶ月の誤り——引用者）にも及んだということです。その間にいまマカオにいる三人を除いて全員が亡くなったといえます。

乗組員は飲み水がないのに大いに苦しみ、壞血病（ビタミンCの欠乏によって起こる病気——引用者）がひろまったために、かれの話だと、「手足がたるのように腫れあがった」ということです。コンパスをもたずにそんなにも長い期間、海上をただよっていたとは信じられない話です。三人が当地に来てから、鎖国をしいている未知なる日本は、ますます注目されています。……

(S. W. Williams: *The Life and Letters of S. W. Williams...* 45)

ついで同年十一月、こんどはギュッラフが日課を手紙で報告し、その中で日本漂流民のようすを語っている。

午前七時から九時まで旧約聖書の中国語訳をおこない、「それから九時半から十二時まで、二、三人の日本人の助けにより、新約の日本語翻訳に従事する。十二時より午後一時まで、右翻訳文の厳密なる訂正」。

さらに午後一時から二時まで、中国語のトラクト（小冊子）の準備。二時から五時まで中国文学の研究、書籍の領布、病人の見舞、学校の管理。六時から十時、寝るまで、手紙を書いたり、業務の整理など……。

このようにギュッラフは、毎日無為にすごすことはなく、この日課表を見るかぎり、くつろぐひまもなかったような印象をうける。

ここで注意すべきは、ギュッラフが三人の日本人の協力を得ながら、新約聖書のうち『約翰福音之伝』(新嘉坡堅夏書院蔵版、善徳纂)と『約翰上中下書』(新嘉坡堅夏書院蔵版、善徳纂)の日本語訳に着手し、それを完成させたことである。

和訳は、三人の日本人がマカオに送られて来て早々の、一八三五年十二月から翌三十六年十一月までの約一年のあいだに終え、その訳稿はシンガポールの米国伝道協会の出版所(堅夏書院)に届けられ、一八三七年五月には木板刷りで出版された。『約翰福音之伝』は一五二五冊、『約翰上中下書』は一四〇〇冊刷ったものらしい。<sup>(35)</sup>

ギュッラフ訳は、無学な日本人水夫を助手として翻訳したものであるため、誤りが多く、意味不明な箇所も多々みられるが、尾張方言が混入しているので方言研究の資料として貴重な文献と考えられている。<sup>(36)</sup>

ふたたび話をもどす。一八三六年十一月の、ある日曜日のギュッラフの活動はつぎの通りである。

午前七時から九時までは、中国語の旧約研究会、十時から十時半まで中国人の教会に出かける。「十二時から午後一時まで日本人の礼拝」。三時から六時まで、中国人の家庭訪問。六時から七時まで中国人の日曜学校。七時半から九時まで、病院にて英語の説教。<sup>(37)</sup>

ここで注意を引かれるのは、「日本人の礼拝」である。これは三人の日本人が、教会堂でキリスト像をうやまい、おがんだ、と解することができる。かれらは漂流ちゅうにキリスト信徒になったということであろう。

三人の日本漂流民がマカオで暮らしはじめて一年数ヵ月経った、一八三七年三月のこと、九州出身の漂流民が四名マカオに送られてきた。異郷においてはからずも同胞と出会って、三人の日本人は歓喜したことであろう。

この四人はいずれも九州の出身であり、天保六年十一月一日(一八三五・一二・二〇)、八十石積の船で天草を出帆し長崎へむかう途中、大風によって吹き流され、難波して三十五日後にルソン島(フィリピン)の北岸に漂着した者たちであった。

船頭……………庄蔵(肥後の飽託郡川尻の出身)

水夫……………寿三郎(肥後の玉名郡坂下手永晒浦の出身)

熊太郎……………(肥前の島原の出身)

力松………(肥前の口之津の出身)<sup>(38)</sup>

これら四人の漂着者たちは、陸にあがってほどなく十五、六人の「黒人」に取りかこまれ、持ち物をすべて奪われたあげく、山中の村へ連れてゆかれ、村を転々とするうちに役人に引き渡され、船でマニラに送られた。やがてかれらはスペイン官憲の手でマカオに護送されたのである。

四人はマカオに着いたとき、頼るべき知人なく、途方に暮れ、日本人らしく自殺するほかないと考えたが、<sup>(39)</sup>アメリカ海外宣教師団の世話でギュッラフ師に身がらを託され、その庇護のもとで新しい生活をはじめた。

モリソン号の日本遠征。

イギリス側は、日本漂流民の故国送還に熱意を失ないかけていたが、広東に拠点をおくアメリカのオリファント商会(一八二八年に設立)は、同商会の持船モリソン号によって、日本人を故国に送還しようと計画した。

はじめギュッラフは、モリソン号の姉妹船ヒマレー号で日本漂流民七名全員を送還しようとし、イギリス商務庁に懇請したが、<sup>(40)</sup>漂流日本人を外国船で日本へ送り還すのは危険であるため、いったん琉球へ送るほうがよいとの判断により、ギュッラフ案は拒絶された。代わって浮上したのは、オリファント商会の広東の支配人チャールズ・キングの案であった。

キングは、日本人七名を別々に連れてゆくことに反対した。イギリス商務庁の長官の提案は、ギュッラフと漂流民七名は、折からマカオに到着したイギリス軍艦ローレイ号に乗り、同船が琉球へ行ったときに、キングら日本へ行く船と那覇で落ちあい、ギュッラフと日本人らはキングの船に移乗してはどうかといったものであった。

キングはこの案に対して反対した。かりに航海の途中であっても、日本人がイギリスの軍艦に乗ってきたことがわかると、日本側に疑惑を抱かせることになる。けっきょくギュッラフだけがローレイ号で那覇へ行き、そこで日本へむかう一行と落ち合うことにし、一方漂流民七名はマカオからアメリカ商船に乗ることが決まった。<sup>(41)</sup>

日本漂流民の本国送還を口実に、日本遠征を計画したオリファント商会の真のねらいもしくは野望は、日本との通商ならびに伝道の

糸口をつかむことであった。

かくしてオリファント商会によって周到に用意されたのは、快速帆船モリソン号（五六四トン、船長D・インガソル）であった。一八三七年七月三日（天保八・六・二）の夕刻<sup>④</sup>――

C・Wキング夫妻

医療宣教師ピーター・パーカー（一八〇四～一八八）

サミュエル・ウェールズ・ウィリアムズ師（一八二二～一八四）

七名の漂流日本人

らは、マカオの錨地に碇泊中のモリソン号に乗船した。

モリソン号が日本へむかう目的についてパーカー師は、「漂流民七名を故国へ還してやることであり、究極には神の栄光によって、三千五百万人の国民を救済することである」と、語ったという。

翌七月四日（アメリカ独立記念日）、乗客および船員総数三十八名はマカオの錨地を出帆し、針路を東バシ海峡にさだめたころ強風と遭った。十一日午前六時ごろ、日本領土の八重山群島を望見し、その後東シナ海に入った。十二日の午前六時ごろ、南西の方角に琉球列島を見、午前十一時に那覇に投錨した。十五日の午後、ギョウラフが軍艦ローレイ号からモリソン号に移乗したので、直ちに抜錨し、江戸湾口をめざした。

その後の航海のようすを記すと、次のようになる。

七月十六日……前夜、琉球列島の南端を迂回し太平洋に出た。明け方、船は海岸から二〇マイル沖を航行していた。

七月二十七日……遠江国御前崎を望見した。

七月二十八日……強力な潮流に助けられ、船は大島沖を通過し、城ヶ島をみとめた。

七月二十九日……午前十時ごろ、船は伊豆岬から十二から十四マイルの地点を航行していた。雪をいただいた富士山を望見し、また丘陵や森や岩から成る陸地が目に入った。船が徐々に江戸湾ふかく入ってゆくにつれて、四、五十隻の和船をみた。

パーカー師は、日本本土を見てこおどりして喜ぶ漂流民たちのようすをつぎのように描写している。

七名の男は、ふたたび故国の海岸をみて歓喜した。かれらはやり出し（帆船の船首に突き出ているマスト状の円材―引用者）の上に腰をおろし、「祖国」を食い入るような目でじっと見つめ、じぶんたちが熟知している岬、島々、山などを認めると、改めて歓声をあげた。

漂流民の心は、もうすぐこの地上において最もいい、しかも一別以来ひじょうに長い歳月になる者たちのもとに戻れると思って、意気盛んであるようだった。<sup>(43)</sup>

しかし、漂流民たちは、それが糠喜び（ぬか喜び）におわろうとは、夢想だにしなかった。

モリソン号は、北東風に悩まされながらも江戸湾の奥へ奥へと進んで行った。尾張出身の音吉、政吉、岩吉の三人は、かれらにとつてなじみの風景や岬などをウィリアムズ師に指し示したという。<sup>(44)</sup>

一八三七年七月三十日（天保八・六・二八）、モリソン号は、雨まじりの向い風（45）に悩まされながら三崎の南にあたる方角を進んでいた。午前十一時ごろ砲声のようなものを聞いたが、外国船の接近を江戸に知らせる合図のようにおもえた。

この日の朝、浦賀奉行・太田運八郎は、三崎詰支配組与力・香山助七郎より異国船出現の急報に接したので、直ちにその旨を江戸に報告した。平根山砲台では、モリソン号が近づくのをもとめたので、砲撃を開始した。<sup>(46)</sup>

この日、濃霧や雲が陸地をおおっていたので、砲火をよく見ることができなかったが、空が晴れてくるにつれて、浦賀の南にある砲台がみえてきた。ところが盛んに大砲を打ちかけてくるので、午後二時ごろ砦の南二キロほどの沖に投錨した。<sup>(47)</sup>モリソン号が碇泊したのは、三浦郡野比村（あざ）白根附近であるらしい。<sup>(48)</sup>

投錨してしばらくすると、港のあちこちから小舟がモリソン号の方にやって来た。日本人ははじめびくびくしているように見うけられたが、外国人からタラップを登ってくるよう合図されると、すなおに甲板に上ってきた。その中に六十歳台の老人がおり、そのあとから大勢日本人がやってきた。船の大きさを測ったり、マストの先端をみてあつけにとられている者もいた。

キング夫妻がいる後甲板後部の船室に招かれた日本人は、甘いワインや軽食をふるまわれた。ワインを好む日本人は、ほとんどいなかったが、パンはいちばん人気があった。<sup>(49)</sup>見物人は、この日だけでも二百人を超えた。

その夜は何事もなかったかのように暮れて行った。一夜明けて七月三十一日の午前六時ごろ、突然砲撃がはじまった。<sup>(50)</sup>夜のうちに砦から大砲を海岸へ移動し、未明の砲撃となったのである。

インガソル船長は、直ちに抜錨の命令をくだした。砲弾は大きなうなり声をあげながら船のまわりに落ちてきた。モリソン号は、やむなくこれ以上の江戸湾の奥に進むのは危険であるばかりか、日本側との交渉の余地もないとの判断に立って退去することに決した。

しかし、立ちのく前に湾内にいる日本の漁船乗組員を船に招くと、陸にいる役人たちに、じぶんたちの国籍や来航の目的などを伝えて欲しい旨依頼したが成功しなかった。<sup>(51)</sup>

一方、長崎オランダ商館からの密告（風説書）により、漂流の日本人七名を乗り組ませたモリソンというエケレス船が、漂流人たちを送りとどけに江戸近海に来るが、そのじつ日本との交易を願ひ出るのが目的等<sup>(52)</sup>について、幕府が細大洩らさず知るのは、翌天保九年六月（一八三八・七）のことであった。そのとき評定所において、外国船打払いの可否をめぐって評議がおこなわれた。

ともあれモリソン号は、砲撃をうけ、船の中央部の左舷に命中弾さえうけた。江戸湾からの退去に際して、いちばん落胆したのは七名の漂流民たちであった。かれらは破船の難に遭い、苦難のはてに母国に戻ってきたのに、上陸どころか砲撃をもって追い払われたのである。

漂流民の内二人は、本国のこの仕打ちを恨みにおもい、帰国の望みを断ち切るために頭髮をすべて切り落したようである。

薄命ナル日本人<sup>自註漂流七人</sup>ヲサス 今ハ永世本国ヨリ追放セラレ 還リ来ルベキ取扱ニアヒテ 大ニ怨ヲ含メテ気色ハアラハレケル 七人内二人ハ  
巴レカ本国ヲ思ヒ切タル証拠ナリトテ全頭ノ毛髪ヲ刺<sup>不痛</sup>□タリ

（写本「天保八年六月モリソン船打払之妹末 全」<sup>(53)</sup>より）

モリソン号は、そよ風に乗り、江戸湾を出たのち、志摩国鳥羽を目ざしたが、風のむきがよくないために一路鹿兒島にむかった。

八月十日同船は薩摩国揖宿郡兒水村（しゅうこ）の沖に碇泊し、漂流民護送の意味を徹底するよう努めたが、不成功におわり、さらに船を山川に近い所まで進航するようにいわれたので、その通りにすると、八月十二日の午前中、浦賀のときと同じようにここでも砲撃をうけた。かくして漂流民たちは、故国を目前にしながら帰国を果さず、空しく日本を去ったのである。漂流民のひとり、音吉はウィリアムズ師にいった。「またやってみましょう」と。（65）モリソン号は、同月二十九日の夕刻（66）、つがなくマカオの錨地に帰着した。

商業的にいえば、オリファント商会が、今回の日本遠征の失敗でこうむった損失は、二千ドルにもなった。大金を投じたわりには、何んの利益もなかった。ましてや布教活動や科学的の調査もおこなえず、成果はゼロであった。（67）

マカオ帰着後の漂流民七名の動靜。

七名の日本漂流民たちは、故国の山河を目のまえにしながら、断腸の思いでマカオに帰航したのであるが、この間のかれらの心情を写したものに水夫・寿三郎が、天保十二年（一八四一）オランダ人に托して故郷の家族（父や兄）に送った書簡がある。原文は漢字まじりのカタカナ文であるが、読みづらいので、漢字と平仮名で表記することにする。

#### （前文略）

この国の城下にまいり、この国より唐廣澳門という所に送られ。この所より尾張の人三人ともになり。この人の名、岩吉音吉久吉。この三人ともに、アメリカといふ国のふ子（68）にて、江戸浦賀ノ口まで参り候ところ、その所より、石火矢鉄砲打ち（69）いだされ、その石火矢の玉で、岩吉わずかのことで、危うき命をもうけ。

ならびにまた、薩摩へ参り、こんどはわたくしと庄蔵殿と、桜島にあがりて、御役人に告げ候ところ、ちかもつに、錨をおろさせ、二日待たして、三日目の朝より、また石火矢鉄砲打ちいだされ、まことにそのときの哀し（70）さわれ、かえすくもうみやま（71）（海山引用者）何にもたえ（72）ることなき。

また是非（なくか）唐澳門に帰り、いまで住みいるなり。ただしわたくし共、かように艱難苦勞いたして、助すかりし命なれば、また日本へ帰って、天下様のまたごなんだいになって、そのうえに、せいはいにてもあうようならばまたく哀しみの上の、何ともうすやうはなし。（73）……

尾州出身の岩吉、久吉、音吉ら三人は、マカオに帰着後、ギュッラフの家でくらすかたわら、イギリス商務庁に勤めていたようである。

ウィリアムズ師は、モリソン号の日本遠征の航海五十六日間を総括し、それを『チャイニーズ・ミッシヨナリ・リコーダー』（一八七六年）に投稿するのだが、この中でマカオ帰着後の日本人漂流民の消息をつたえている。

同人によると、七名の日本人はいろいろな仕事に従っている、といい、ほとんどの者が役に立つ人間だという。氏名は明らかにしていないが、ギュッラフ師宅に二名、マカオのわたしの印刷所で二名の日本人が仕事を手伝っているという。これら四名の日本人はウィリアムズ師の日本語教師であり、かれらの手を貸りて「創世記」「福音書」「ヨハネの書簡」などを日本語に訳したと述べている。<sup>(59)</sup>その後の七名の漂流民の動静を一覧表にしてまとめると、つぎのようになる。

岩吉……のちマカオより寧波に移るが、女房が不義をはたらき、先夫の手にかかり殺されたようである。

久吉……のちマカオより香港に移ったものか。一八四九年、イギリス商務庁に勤務していたギュッラフは久吉の昇給を願いでた。一八五二年に同行を退職。のち上海に移住。

音吉……一八四八年（嘉永元年）もしくは一八四九年（嘉永二年）にマカオを去り、上海に移住した。デント商会のビール家の門番に雇われ、外国人から「オットソン」の愛称で呼ばれた。同年イギリス軍艦マリナー号に乗り、江戸湾測量のため浦賀に来航。文久元年（一八六一）末、家族を連れて妻の郷里であるシンガポールに移住。

つぎの四名は二カ年間、マカオのウィリアムズ師の家でやかいになったのち、うち三名は中国沿岸の都市に分散するに至った。

庄蔵……のち香港に移り、洋服屋となったらしい。その後の消息は不明。

寿三郎……マカオで死去。埋葬地は不詳。



熊太郎……七名のうち、いちばんその消息がはっきりしない。

力松……のち香港に移り、イギリス商務庁に勤務した。一八五五年（安政二年）三月、エリオット提督のひきいるイギリス艦隊に随行して箱館にくる。同年九月長崎奉行との交渉において通訳をつとめる。十月、スターリング提督に同行し、長崎において通訳をつとめる。

摂津兵庫中村屋伊兵衛の持船「栄寿丸」（千石積）は、天保十二年（一八四一）の冬、奥州南部表へ商いにむかう途中、漂流し、乗組員はスペイン船に救助されてアメリカへ渡った。のち生残った者は、マカオ、乍浦を経て長崎に帰着した。

水夫の惣七（能登の生まれ）は、マカオ到着後の天保十四年十一月九日（一八四三・一二・二九）、医者や中国人の世話を受けながら当地において病死した。役人体の者十数名来て検死をすませたのち遺体は棺に入れられ、中国人の人夫にそれをついでもらい墓地に運んだという。

墓地は「町筋四丁程（町の通りを約四百メートル―引用者）参り、山手へ式三丁登り候所」にあったという。この山をくだった所に寺（本堂七間程、観音を安置）があり、その僧にお布施し、墓地へ同行してもらい読経してもらった。

墓地に「日本人誰と認め」た墓石が二つ、中国人の墓にまじってあったという。この内の一つは、漂流民寿三郎のものであろうか。惣七の墓には、「日本人惣七」と彫ってもらったよう依頼した（『栄寿丸漂流口書』<sup>(60)</sup>）。

マカオの外人墓地には、「ポルトガル人墓地」（Cimetério de S. Miguel、一八五四年開園、四三〇九体埋葬<sup>(61)</sup>）、「回教徒墓地」（一七七四年開園、摩羅園路 [Ramal dos Mouros] にある。墓石は約百）、「大天使聖ミカエル墓地」（一八五四年開園）、「新教徒墓地」（一八二二年開園）、「ゾロアスター教墓地」（一八二九年開園）などがある。（<sup>(62)</sup> 島尾伸三『マカオで道草』大修館書店）。

またマカオの三大寺（禅）院は、「媽閣廟」「蓮峯廟」「普濟院」（通称「観音堂」）などであるが、日本人が葬られたのは、このうちのどの寺院の墓地であろうか。わたしは日本人が葬られたのはきつと「普濟院」であろうと思ひ、その墓地を訪れ、新旧の墓碑を探索したが、それらしきものは何も発見できなかった。

一八三一年六月二十日（天保二・五・一一）、備前岡山の多賀屋金十郎の持船「神力丸」の漂流民らが、マニラ経由でマカオに送ら

れてきた。

一八四一年三月十九日（天保一二・閏一・二七）、アメリカ船が遠江の漂流民赤堀仙太郎（37）、上山松之助（50）、浅山辰蔵（28）ら運んできた。翌一八四二年七月、陸奥の甚助、長次郎以下六名がマカオに送られてきた。一八四三年一月三日（天保一三・一二・三）、加賀の長兵衛（25）、安兵衛（27）らが、アメリカ船に乗りハワイより送られてきた。ついで同年二月八日（天保一四・一・一〇）、摂津の中村屋善助（25）、尾張屋初太郎（22）らがアメリカ船で送られてきた。

一八四四年三月（天保一五・一）、摂津の兵吉なる者がマカオに送られてきた。<sup>(62)</sup>

このように一八三二年から一八四四年まで、日本漂流民は記録にあるだけでも六回もマカオに送られて来たのであるが、かれらは、マカオにいる同胞と会い驚喜し、のちかれらの多くは音吉らの世話により乍浦<sup>ザイプ</sup>から唐船<sup>ジャンク</sup>に乗せられ長崎に送還された。

ともあれ七名の漂流民のその後の足取りは必ずしもはっきりせず、めいめい運命に翻弄され、各地を転々とし、さいごは異郷で果てるのであるが、この中でも比較的消息がはっきりしているのは音吉だけである。

これより同人を中心に、その後の波乱にみちた人生について述べてみたい。音吉はマカオで十数年暮らしたのち、一八四八年（嘉永元年）かその翌年あたり上海に移住し、デント商会（「英商怡和洋行」）に雇われた。かれは、同商会に勤務するビール<sup>(63)</sup>（Beale）氏の門番兼倉庫管理人としての仕事を与えられた。

上海の地は、東西一里余、南北は二里余、その間に人家充満し、皇城の北方にはイギリス・フランス・アメリカの借地があり、そこに洋館が立ちならんでいた。一八六〇年代の家屋はおよそ十万戸であったという。<sup>(64)</sup>

デント商会というのは、ラッセル商会と肩をならべる程の豪商であった。利にさとく、日本の一分金を買ひ占めたり、アヘンの密輸などによって財をなし、その金力で「香港上海銀行」（匯豐銀行）を設立したが、一八六五年の金融界の危機によって破産した。<sup>(65)</sup>

嘉永六年（一八五三）に上海を訪れ、のち帰朝した日本漂流民は、役人に提出した口書の中でデント商会をつぎのように伝えている。

音吉の主家と申すはイギリスより出店の様子にて、諸色<sup>しよしよ</sup>（いろいろの品）引用者）買集め、イギリス送り候由にこれ有り候て、私ども度々<sup>たびたび</sup>参

り、草ひき夜番等致し候、此者宅は、地面一丁四方位にて外圍かこひ蔵くら或は長屋にて、其中に長十八間横十四間、是皆三階にて、屋根は箱の如く、障子はギヤマン（ガラスの意―引用者）開きにて、都てアメリカ同様にこれ有り候、家来三拾人程居り候、妻子これ無く主人一人にて憐み深く、毎々私共へ言葉ことばを懸け呉候（「播州人米国漂流始末」<sup>(66)</sup>）。

音吉は、デント商会に勤務中、イギリス軍艦に乗り、二度ほど故国日本へもどった。一八四九年（嘉永二年）五月、測量のために日本へ赴くマティソン提督がひきいる軍艦マリーナ号に通訳として乗り組み、相模国城ヶ島沖にすがたを見せた。

浦賀奉行所詰の役人がマリーナ号を訪れたとき、「林阿多」<sup>(リニアト)</sup>（じつは音吉）、という名の中国人と覚しい、イギリス服を着た、年は四十歳ぐらいの者が応接にでた。役人は生国はどこかと尋ねると、上海と答えた。また日本語がうまいが、どこで学んだかと聞くと、長崎を十四、五度ほど訪れたことがある父から習った、といった。

林阿多は黒い長い髪をしていたといい、容貌は日本人と寸分たがわなかった。日本役人は「林阿多」の人相をスケッチしたが、それはつぎのようなものであった。

- 一 年齢三十五六才位、中肉ニ而丈並より少々低き方、
- 一 面（顔―引用者）大きく角張り平たき方、
- 一 色赤黒き方、
- 一 髪之毛黒く濃き方、
- 一 眉毛薄く太き方
- 一 眼常眦（ふつう―引用者）、
- 一 鼻筋通り候方、
- 一 髭無之、
- 一 口常眦

- 一 齒止の前歯一枚か二枚かけ居候様ニ相見候、下齒こまかく不揃之方、
- 一 言舌柔和ニ而小言之方固なまり無之、
- 一 手足小サク歩行様内また、

(嘉永二年閏四月渡来之通詞アウト人相書 「或筆記」より)<sup>(67)</sup>

音吉は身の安全を図るあまり、中国人になりすましたばかりか、偽名まで用いた。

二度目に故国へ戻ったのは、一八五四年九月七日(嘉永七・閏七・一五)イギリス東インド艦隊司令長官ジェームズ・スターリングの旗艦ウィンチェスター号の通訳として、長崎に入港したときである。スターリングは、インカウンター、スタイクス、バラクータら三艦を率いていた。スターリングは、長崎奉行水野筑後守忠徳に宛ててロシアに対する宣戦布告書を示した。それにはロシア艦隊を掃討するために日本近海を遊弋するが、日本の港に寄港することもあるので、承認願いたいと記してあった。

要するにスターリングの要求は、通商を求めたものではなく、クリミア戦争に際して、日本港内にあるロシア艦を襲撃する許可をえるためであった(『開国大勢史』)。

音吉の日本語の学力は、カナ文字が読んだり書いたりできていどであり、英語力にしても挨拶していどの簡単な会話ができるほどのものであったらしい。

前回、マリーナ号で来日したときは、出自について隠すことが多かったが、このときはばかりはみずからの出生、漂流のてん末、中国における暮らしむき、家族、心情などを吐露した。このときは強力なイギリス海軍が背後に控<sup>(68)</sup>いていたせい<sup>(69)</sup>か、みずからについて語ることに何の恐れもなかった。長崎に着いて早々、音吉の素性は日本側に知られ、かれと接した役人のひとりはずぎのように記している。

通弁官は、尾州乙吉と申候。当寅(安政元年)四十九歳、二十一年以前イギリス国<sup>イギリス</sup>之漂流いたし、四十年を経、拾七十年以前、態々船を仕立<sup>たて</sup>、自分を護送<sup>の</sup>のため、浦賀之入津仕候処、一夜内に仮台場(砲台—引用者)出来、翌朝より御打払之御手段、俄に大砲御放発、本船之帆船一

本打折られ候程に付、其儘退帆いたし候後、

帰国すべしなく之術やむこと無え之、不し得こと止事めしつ、彼国かのくにに被めしつ召仕はなされ官位等も授り居候処、此六七年以前より唐国上海之嘆館たうくわん（デント商会—引用者）之詰切り被もうしつけられ申付、滞留まかりあり罷在候。

先年より嘆人と縁組致居候処、病死に付、当人印度人を相迎へ罷在申候。

音吉は今回、役人より帰国するよう勧められたが、故国を捨て中国に帰る決心をし、これからも中国に漂着するかも知れない同胞に、じぶんと同じ歎きを味わせまいと決意した。

「日本にはふたゝびかへらぬとさだめ、我共そのかわり唐土にて、日本人流れ候へば我共より尋ねいだしおくることに相きめ候」（庄藏書簡）。

何よりも母国を捨てたのは、すでに家族を持っており、孝養を尽し追善供養をおこなうことなく亡くなった老父母に対する罪は重く、その浄罪のためにも、同じような境遇にある漂流民の世話をして、日本へ送り帰してやろうと決心した。

はじめ日本国出船之頃は、老父母も有これあり之候儀に付、何卒日本へ帰り度念願罷在候得共、何分右之仕合にて、其儀不そのさ相叶あいか、従て年を重ね、今は両親も相果居可あいはてわりもうすべき申候得は、最早放念いたし、彼国人別かのくににんべつ（戸籍—引用者）に快く相成居申候。

乍併しかしながら両親之在世存養は勿論、追薦とむらひ不で出来、大罪人と罷成候段は、重々残念に付、其消罪之ため、日本人漂流致し、イギリス国之渡り候人は、悉く皆送り届候様、立て取計申度決心仕、是迄数度世話仕、此後逆も同様に心得申候。

（高麗環雜記）。

音吉はデント商会に勤めるかたわら、小舟をもって何らかの副業をやっていたとも考えられる。

上海における音吉の家は、二間四方くらいの部屋が四つある西洋館であった。その住居は十六舗または小東門外附近にあったものと推定されるという。<sup>(7)</sup>間数が四つもある暮らしから考えて、音吉は主家デント商会において、まずまずの地位と収入を得ていたものであ

ろう。

マレー人の妻との間に、二男一女の子どもいた。一八六一年二月、「オットソン」(Ottozon)の愛称で呼ばれていた音吉は、「カディズ」(Cadiz)号に乗り香港に赴いているが、商用か私的な旅だったのか明らかでない。翌一八六二年二月一日、音吉夫妻は子供たちを連れて、「エイドン」(Aden)号に乗ると香港にむかった、と『ザ・ノース・チャイナ・ヘラルド』(The North China Herald)紙の「乗客」の欄にある。

音吉は健康を害したため、一家をあげて上海をあとにし、妻の郷里であるシンガポールへ去ったのである。音吉一家が上海をあとにした本当の理由は、太平天国の乱(一八五〇―一八六四)を避けてのことであつたようだ。音吉はこれまでアメリカ、イギリス、マカオ、上海と住まいを転々とし、いまはまたシンガポールに転じたが、ごくたまに日本人到着のニュースに接すると、懐古の情を起し、喜びの色を浮かべて会いに出かけた。

音吉の住居は、ヨーロッパ人居住区にあり、家は二階家で、部屋は七、八つあり、花木を植えた広い庭に面していた。召使いもいた。持家ではなく借家であり、家賃は月に六〇〇元ということであつた。生計のほうは、「貨物の口入れ」をやって立てているとのことであつたから、商品仲介業のようなことをしていたものか。

音吉たちが暮らした地区は、シンガポールの郊外に位置するシグラップのアーサー街である。このあたりは昔も今も高級住宅地であり、りっぱな家が立ち並んでいる。

文久元年十二月(一八六二・一)、幕府遣欧使節団の随員は、シンガポールに上陸し、ホテルで入湯したとき、音吉が訪ねて来たことを日記に記している。

○ 同十九日 寅曇 八十度

一 日本尾州(近多)葛郡八斥村の者乙吉と申候由 此のホテルに居合御支配向なと色々(はと)嘸致し 三十年以前に吹流れ 兩人存命にて私は支那上海へ居住致し 妻も印度人を持ち子供三人有之(これあり) 只今にては帰ると申するも出来不申(できもうさず) 九ヶ年前アメリカ船にて長崎へ参り候事有之と申候

北京戦争（太平天国の乱のこと―引用者）の嚙なとも致し候由 今一人は支那フク州に居住致候由当年四十才に相成由

（遣欧使節航海日録」より）

もう一つは、つぎのような記事である。

○ 正月二十日（微陰 北風） 同 八十一度

今朝旅館へ年齢凡五十許ノ一異人來テ自曰 我ハ三十年前十七歳ノ時 廻船ニテ漂流セシ 尾州知多郡小野村音吉ト申者ニテ 当時ハ支那ノ上海ニ住居シ 当所ヨリ婦ヲ娶リ 子モ二三人アリテ 今度親子六人連ニテ 帰郷（嫁入りした娘が、実家に帰って両親の安否を問うこと―引用者）シテ留返中ノ所 御国人ノ当所ニ御立寄ト承リ欲ヒニ堪ヘス参リタル由

扨此者漂流ノ最初西洋人ニ伴ハレ 其後諸所ノ戦争ニモ都テ十四度出タリト又曰 七箇年前英船ニ雇ハレ長崎ニ至リ 水野筑州君同所鎮台ノ節通辞セシ由

尚其他件々往時ヲ説話セシカ 語中ニハ 暫ク考ヘナカラ答フル事ナトモアリテ 自ラ言フ数十年邦語ヲ為サ、ルニヨリ 遺志シテ直ニ口ニ出サル言モ多ク有 之ト尤モ左モ有ヘキ事ソト思ハル

説話刻ヲ移シ 且邦人ヲ懷シミ 恋々帰居スルニ忍ヒサル情態ニ見エシ由

（「尾蠅欧行漫録」より）

遣欧使節団に、長州藩士・杉徳輔（のち子爵杉孫七郎）が船中賄方兼小使として参加していた。杉は漢詩人としても令名が高かったが、異郷でたまたま会った同胞のことを感慨のあまりつぎのように詠んでいる。

異郷遇漂客 （いきやうにてひようきやくとあつ） 対話淚潜然 （たいわしてなみだせんぜんたう）

豈得無帰思 （あにかえりなきをえんご） 苦辛三十年 （くしんさんじゅうねんをもちう）

なお、同使節団に定役格通詞として参加した福沢諭吉も音吉とシンガポールで会っている。

十九日 17 月 緯二度 経百四度二十五分 程百五十里

朝第五時、新嘉坡に着す。第一時、上陸し、馬車に乗り、旅館に至り、夜、本船に帰る。

(中略)

○ 旅館にて日本の漂流人音吉なるものに遇へり。音吉は尾州萬郡小野村の舟子にして、天保三年同舟十七人と漂流して、北亞米利加の西岸カリホルニーに着し、其後英に行き、英国の戸籍に属して上海に住し、新嘉坡の土人を娶り三子を生めり。

近頃病に罹りて、摂生の為め十日前本港（シンガポールのこと―引用者）に來り、偶ま日本使節の來るを聞き來訪せり。

余仔細に其面色を認るに、嘗て見たことある者の如し。由て之を問ふに、九年前英国の軍艦に乗り長崎に至りしことありと云。即、安政元寅年、余長崎に遊学の時なり。

(「西航記」より)

このあと音吉は、中国の近況についてる説明している。

イギリス公使オルコックの帰国に同行し、ロンドンで使節団に合流した調役・淵辺徳蔵も、シンガポールで音吉に会った一人であった。

○ 二四日 晴 辰時後上陸 森山氏（蘭通詞森山多吉郎のこと―引用者）と共に馬車に乗り行こと一里余旅宿に着す（中略）

尾張漂流乙吉といふもの旅宿に訪來り物語 十七年前国許より 大坂へ船ヲ出し 大坂より米を積て江戸江廻る時 難風ニて船を損し 櫓を切り風に任して漂ふこと一年程 東北の方に流れ 遂に北亞米利加国所轄の地に着す居こと半年余にて 英国の官吏巡行のものに妹末を告しに



船にて英吉利へ送られ 船を以て 追々印度地に送り 年を経て日本に送り返すつもりにて浦賀に近付し時 陸上より大砲を打<sup>(不効)</sup>三彈まで船に当りし故に 遂に出帆して琉球に致り支那に送られ 上海に暫く留りおり

其後日本と条約取結に成るへき時 又英船に乗て長崎に來り 日本語を通弁致して 長崎の奉行所ニも至<sup>(不効)</sup>り 其節日本に帰るへしと勸られ たれとも 最早帰心なき故に留らす 又上海に住て小舟を持て近來まで生活を成<sup>(なし)</sup>をり 其比より「アールコック」と懇意に成し 故に今日訪來りし也 當時は此地に來りて居住し 妻は土人にて小兒も兩人ありといふ

このように音吉は、多年居所をきめず各地をさすらい、数々の辛酸をなめ、何度か帰国の可能性もあったにもかかわらず、帰国の道をえらばず、故国をすて、異国で骨を埋める覚悟をきめていたことを明かすのがこの一節である。

この日の午後、淵辺は音吉の案内でシンガポール市内を見物し、その帰り同人宅に立寄り、休息している。

午後より乙吉の案内にて所々見物す 乙吉の家の前を過し時 家に立寄休息す 妻も出て面会す 小兒も眠りてあり 家内器物几案盤<sup>(机)</sup>意<sup>(なご)</sup>かー引用者<sup>(杯)</sup>等随分鮮潔なり<sup>(せんけつ)</sup> (新しく、清らかー引用者) 馬車も所持をり 家は二階家にて 間七八席あり 庭も広く花木など植えり 童僕小婢<sup>(ボーイ)</sup>やメイドー引用者<sup>(も)</sup>使へり

此家ハ借家のよし 一年に借賃六百元にて借といふ 何業にてかゝる生計を成<sup>(な)</sup>やと問しに 洋学も相当に出来 語学も可<sup>(かなり)</sup>也出来る故に貨物の口入<sup>(くしゆ)</sup>なとして暮すよしなり……

(「欧行日記」<sup>(72)</sup>より)

この文章により、シンガポールにおける音吉一家の暮らしぶりが分かる。安楽な生活であったようだ。進物取次上番格、御普請役・益頭駿次郎も音吉に会った一人であった。

○ 元尾州某村船乗漂流民音吉<sup>(音吉)</sup> 新嘉坡宿旅<sup>(おし)</sup>於て 支那上海髮賊の始末荒増<sup>(あらふ)</sup>承り候 左の通に有之候

遣外使節一行の随員が、さいごに音吉に会ったのは、元治元年（一八六四）の横浜鎖港使節団（池田筑後守ほか）であり、同使節団に外国奉行支配調役として参加した田中廉太郎は、シンガポールにおいて音吉と会ったことを書簡の中でふれている。

二月十一日 即西洋第三月十一日

正月十九日新嘉坡へ上陸致候処、尾州<sup>オウシュ</sup>葛郡北野村の出生にて百姓乙吉と申者に面会致<sup>いた</sup>し 清朝争乱の始末荒増<sup>あらぞ</sup>承り申候 右乙吉は天保三壬辰年十七歳の節漂流致 カリホル州<sup>カリフォルニア</sup>に至る船の者十五人大半死亡致 二人残り其一人は只今現に福州（中国福建省の省都―引用者）に居候

乙吉は日本へ帰度存し 英船に乗て薩州沖迄参り候処、陸より大砲を放し、中々船を寄候事相成兼 無本意清土を差<sup>さ</sup>而船を返し上陸に至り

終に其地へ住居致 其後英吉利の従属と罷成戦争に従ひ 出候事都合十四度 当時は上海にて川船を乗り生活致候由 其妻は当港の産にて子供三人有之候 此節上海の国乱を避んとのため 病氣と称し保養の爲十日以前当港へ参り候処 幸ひ日本人上陸と承り大に悦<sup>よろこ</sup>び旅館へ尋来候

(後略)

(「田中廉太郎氏の書簡」『旧幕府』第二号、「耳袋」にこの記事あり)

このあと音吉は、上海をめぐる凄惨な太平天国の乱について語っている。音吉の消息はこれをさいごにぶつりと切れるのである。が、十数年ほどして『朝野新聞』（一一七六号、明治10・7・31付）は、音吉に関する記事をかかげた。それは同人がかねて日本籍をえることを懇望していたが、鬼籍に入り、その志を継いだ息子が、尾州知多郡の薬種商に帰籍を依頼する書類を託した、という話である。

○ 世には随分珍しきこともあるもので、今度英領東印度（インド、マレー半島、マレー諸島をふくむ地域の旧称―引用者）のオットソンといふ人が 日本へ入籍志願の子細を尋るを 尾州知多郡小野浦村の百姓山本武左衛門<sup>ぶざゑもん</sup>の三男音吉と云ひし者ハ 幼年より船乗りを好み 遂に水夫

となりしを去る 天保三年十一月 日本近海域航する中 風濤の難に逢ひ 何所ともなく押し流され 十一ヶ月間ハ 無量の辛苦□<sup>不</sup>なせしが、漸くにして北亜米利加に着せり

此時乗組十三人の内十人ハ 已に船中に死し 音吉と外二人ハ 此地に着してより僅に露命を繋ぎ居たるに 七ヶ月を経て二人も亦死し 其後音吉ハ 不図英船に乗りて、倫敦に到りしに 更に東印度に送られ彌<sup>い</sup>より便りなく思ひ居るとき不思議の良縁えて 同所貴人の処女を娶り 一男二女を設け 家ハ追々繁昌して 銀行の株主にまでなりしが 今を距ること十一年前五十二歳を一期にシンガポールにて没せり

現に其妻某(四十四年マレイス人) 長男ジョン、ウィリアム、オトソン(十八年八ヶ月) 長女某(十六年六ヶ月) 次女某(十五年一ヶ月)ハ存在するといふ 然るに音吉が存命中 其の履歴を語り 常に日本へ帰籍いたし度志願ありしにより オトソンも其志を継ぎ 兼て日本へ帰籍せんと思へど 旧幕府の成規に 一度外国へ往き帰朝せしものハ 永牢を申し付らる□<sup>不</sup>由聞き伝へ 遺憾ながらも思ひ止りしが 聖明の世に逢ひ 航海の道も開けしより 此度尾州知多郡横須賀本町の葉商村湊利兵衛といふ人が 支那にて貿易し 東印度に廻りて帰る時 オトソンより右の次第を物語り 帰籍の次第を物語り 帰籍の志願を同人へ依頼し 且つ洋字にて委しく音吉の履歴を記したるもの託せしとの事が 愛岐日報に出ました

この記事が出て約二年後の明治十二年(一八七九)六月、『東京日々新聞』(二三五九号、明治12・6・18付)は、音吉の息子ジョン・ウィリアム・オットソンが日本を訪れ、神奈川県庁へ入籍願を提出したという記事を掲げた。

○ 尾州智多郡の産にして 四十年前に亜墨利加へ漂流したる山本乙吉の子ジョン、ダブリュー、オトソンハ 此のため帰朝して神奈川県へ入籍を願ひ出たり 其願書に曰く

### 入籍願

私儀日本人の籍に入り 神奈川県へ入籍奉 願 度 抑 私 父は 日本人にして 山本乙吉と申 尾張国知多郡小野原村の者にして 常に東京名古屋の間に 船乗を業とし罷在候処 凡四十年前 航海の折柄 暴風に逢ひ米国に漂泊し 是にて私父及其他二名の者 亜墨利加

印度人の為に助られ 其後父其他英人の救助により日本へ携伴いたし呉候処

其時日本の法律として 凡そ何人にてても日本人民たる者 一旦本邦を去る時ハ 再び帰るを免されず 且帰国するも死刑に行ハるゝの法あれ  
バ 不得已同船にて上海へ携へられ 暫く同処に在住し 其後同処に於て私母なる者を娶り 一千八百六十三年上海を去り シンガポールに赴  
き 其後同処にて鬼籍に入り申候

兼て私父存命の節より 私義ハ日本国へ帰り

日本人民の籍に入り候様の志願に付 日本人民の籍に入り 当県へ入籍仕度 此段何卒御領承成 下度 候 様 奉 願 候 再拝謹言

神奈川県令殿

ジョン、ダブリュ、オットソン

この願書は、明治十二年七月二十四日付をもって聞き届けられ、オットソンは父親と同じ山本音吉を名のった。が、どういうわけか、同十六年にもとのイギリス籍への移籍を願いでた。けれどこの願は許可されなかった。わが子を日本籍に入れることが、帰国を断念し、故国に思い寄せながら他郷で果てた音吉のさいごの悲願であったのだろうか。

いま引いた『朝野新聞』と『東京日々新聞』の記事は、音吉の晩年の暮らしとその死について示唆に富んだ内容を含んでいる。シンガポールへ移住した本当の理由は、太平天国の乱を避けることと考えられるし、同地で隠栖してからは家業も栄え、身代をこしらえたようだ。

没年は明治維新の前年——一八六七年（慶応二年）である。生まれた年は、文化十三年か十四年（一八一五、一八一六）であろう。郷里の良参寺にある過去帳に、戒名は「満海寂円信士」とあるが、終焉の地については「没所相知」とあるという。<sup>(78)</sup>

「シンガポール日本人会」は、音吉の足跡に重大な関心を持ち、その史跡史料部はかれの追跡調査をおこなった。その結果、音吉（ジョン・マスユウ・オットソン）の市民権獲得登録の写し（一八六四・一一・二〇付）と「シンガポール・キリスト教墓地」の音吉の埋葬記録をみつけ、その写真を『戦前シンガポールの日本人社会—写真と記録』（一九九八・九・二七刊）に「シンガポールに定住した初めての日本人『音吉』」と題して発表した。

埋葬記録のほうは、文字の判読がひじょうにむずかしい。亡くなった日時は不明である。葬られたのは一九六七年一月十九日（慶応二・一二・一四）であり、埋葬地はブリット・ティマ街（郊外）の「オールド・クリスティアン墓地」である。現在この墓地はなく、跡地に病院が立っているという。埋葬記録によると、音吉は五十歳で亡くなり、死因は血友病（遺伝性の病気で、出血しやすく、止血の困難な疾患）であった。職業は商人とある。

またその兄久吉の消息であるが、音吉と同じように上海に移住し、その後もずっと同地で暮らしたのち亡くなったものと考えられる。文久二年五月（一八六二・六）、幕府の官船千歳丸は日中の貿易調査のために、邦人を五十余名乗せて上海へおもむいたが、御小人目付・塩沢彦次郎の従者として佐賀藩士・中牟田倉之助（一八三七―一九一六、のち海軍中将）も一行中にいた。

中牟田は上海滞在ちゅう、音吉なる日本漂流民がいることを知り、面会しようとしたが、相手はすでにシンガポールに去ったあとのことであった。六月十四日（七・一〇）、同人の代りに音吉の兄久吉の家を訪ねあてたが、「日本人たることを押隠して実を語らざりき」（中村孝也『中牟田倉之助伝』杏林舎、大正8・11）ということ、取りつく島もなかったようだ。

『ノース・チャイナ・ヘラルド』紙（六六四号、一八六三・四・一八付）の「乗客」の欄に、香港から上海に入港したペキン号にJ・オットソンが乗っていたが、これは何んのための上海訪問であったのか明らかでない。ことによると、兄の様子をうかがうための訪問であったのだろうか。いずれにせよ故国にあつい思いを寄せながら異国で果てた、音吉ら日本漂流民の話は哀感にみちたものである。神奈川県庁に入籍を願ひ出て、いったんは日本臣民となったJ・W・オットソンには後日談がある。かれのその後の動静は明らかでないが、十数年後、同人は神戸に姿を現わし、二、三の外国商館<sup>(註)</sup>に勤務したようである。そして再び姿を消すのであるが、シンガポールに帰ったものかどうか不明である。

なお音吉には妹がおり、同人は養子をもらい実家を継ぎ、現在その子孫（山本準治氏、愛知県美浜町観光協会会長）は、愛知県知多郡美浜町大字野間字本郷一―五で、観光旅館「山本屋」を経営している。

この稿を書きおえ、原稿を印刷所に送ってから、音吉の足跡をもとめてシンガポール、マカオ、香港への旅に出た。夏のいちばん暑い時期であったから、どこでも汗が吹き出た。さいわい訪問地において若干の新史料に接し、また未知の文献とも出会えたから、あな

がち無駄な旅ではなかったし、充実した探訪旅行であったといえる。

イギリス、ポルトガルの旧植民地であったこれらの街には、いま近代化の波が打ちよせ、高層のモダンなビルが盛んに建てられている。古きよき時代の建造物は無残にも取りこわされつつある。かつて歴史の博物館と称されたマカオに残る廃墟のような古い家屋にしても、早晚痕跡をとどめないにちがいない。だから木下本太郎（一八八五～一九四五、本名・太田正雄、文学者、医学者）がいうように、いまのうちに東洋史の研究者・建築家は、この地に長く留まって精細な記録をつくる義務がある。そしていまのうちに写真をたくさん入れた論文<sup>モノグラフ</sup>を作っておく必要がある。筆者もまた氏の意見をよしとする者であり、この稿にできるだけ多くの図版や写真を添えることにした。

さいごに国内外の諸機関のやかかいになったが、とくに財団法人東洋文庫、国立公文書館をはじめ、ロンドン、シンガポール、マカオの各公文書館のお世話になった。記して謝意を表します。なお本稿は、平成十五年度国内研究の成果報告である。

# 注

- (1) 山本豊治郎他編『野間町史』（非売品、誠進社、昭和三十年三月）、二六頁。
- (2) キュッラフが Edward Elmslie (Secretary Treasurer) に宛ててマカオから出した一八三六年三月二十八日付の書簡。この中には岩吉、休吉、音吉らの遭難の顛末が語られている。なお、キュッラフの伝記ならびに著作については、*Memorials of Protestant Missionaries to the Chinese: giving a list of their publications, and obituary notices of the deceased, American Presbyterian Mission Press, Shanghai, 1867* がくわじふ。
- (3) 注(2)のキュッラフ書簡を参照。
- (4) Richard Hildreth: *Japan and the Japanese*, Bradley, Dayton & Co, 1861, p. 491 には、アメリカの北西海岸のクウィーン・シャロット島に上陸したとある。
- (5) 注(2)のキュッラフ書簡。
- (6) 村上健次、川北稔編『イギリス近代史』（ミネルヴァ書房、昭和六十一年二月）、一三六頁。

- (7) 同右、一三四頁。
  - (8) 注(6)の一四〇頁。
  - (9) 高見玄一郎『海の世界史』(朝日新聞社、平成元年六月)、二五三頁。
  - (10) 同右、二四九頁。
  - (11) 注(9)の二五一頁。
  - (12) The London Society: *London of the Future*, T. Fisher Unwin LTD, London, 1921, p. 155
  - (13) クリストフ・ファン・ヘーデル著『ロンドン ある都市の伝記』(朝日新聞社、平成九年二月)、二八一頁。  
機山徳衛訳
  - (14) 奥平武彦「英政府と日本漂流民」(明治文化研究会編『明治文化研究論叢』一元社、昭和九年四月)、一二二頁。
  - (15) 同右、一二二頁。
  - (16) 注(14)におなじ。
  - (17) ロバート・モリソン(一七八二―一八三四)は、一八三四年八月一日に亡くなっていた。
  - (18) 注(14)の一二三頁。
  - (19) J. N. Reynolds: *Voyage of the United States Frigate Potomac, under the command of Commodore John Downes, during the Circumnavigation of the Globe, in the years 1831, 1832, 1833, and 1834; including a particular Account of the Engagement at Quallah-Battoo, of the coast of Sumatra; with all the official documents relating to the same.* Harper & Brothers, New York, 1835, p. 340
  - (20) 春名徹『にっぽん音吉漂流記』(中央公論社、昭和六十二年一月)、七七頁。
  - (21) Sir Andrew Ljungstedt, Knight of the Swedish Royal Order Waza: *An Historical Sketch of the Portuguese Settlements in China; and of the Roman Catholic Church and Mission in China. A Supplementary Chapter, description of the city of Canton*, republished from the Chinese Repository, with the Editor's Permission. James Munroe & Co, Boston, 1836, p. 15
- なお、同書の著者ユングステットは、一七五九年三月二十三日にスウェーデン南部のリンチェピングで生まれ、一七九八年中国にやって来た。商人、学者として広東、マカオで三十七年間暮らし、一八三五年十一月十八日マカオで死去。その墓は同地の「オールド・プロテスタント墓地」

にある。

- (22) 島尾伸三『マカオで道草』（大修館書店、平成十一年十二月）、一一頁。
  - (23) *Description of a view of Macao in China, now exhibiting as the panorama, Leicester Square, printed by the proprietor, Robert Burford, Printed by Geo. Nichols, Earl's Court, London, 1840, p. 5*
  - (24) 注(21)の二八頁。
  - (25) 注(23)の五頁。
  - (26) *An Account of a Voyage to India, China & C, in His Majesty's Ship Caroline, performed in the year 1803-4-5, interspersed with descriptive sketches and cursory remarks, by An officer of the Caroline. Printed for Richard Phillips, London, 1806, p. 85*
  - (27) 注(21)の三二頁。
  - (28) 土屋喬雄 玉城啓訳『ペルリ提督 日本遠征記(一)』（岩波書店、昭和四十八年一月）、三四一頁。
  - (29) 青木枝朗訳『ヒュースケン日本日記』（岩波書店、平成元年七月）、一一八頁。
  - (30) 注(26)の八二頁。
  - (31) 注(26)の八三頁。
  - (32) 注(23)の五頁。
  - (33) 「亞媽港紀略稿 完」(内閣文庫蔵)は、マカオの風土などについて記したもの。
- 此記ハ寛政乙卯五月 奥州仙台の舟人源三郎等 安南へ漂着シテ媽港ニ送ラレ 媽港ヨリ広東へ送ラレシトキノ聞見(聞見―引用者)ヲ問テ 筆記スル処ナリ 彼等モト一丁ヲ知サレハ 其語固ヨリ微ヘキニモ足ラサント聞ニ任セテ 姑ク附記ス
- (34) 秋山寛兄「カール・ギュッラフ略伝と日本語訳聖書」(『約翰福音之伝解説』に収録)、八頁。
  - (35) 同右、一三頁。
  - (36) 注(34)の一八頁。



- (37) 注(34)の八頁。
- (38) 川合彦充「モリソン号の来航と日本人漂流者(上)」(『海員』六四号所収)、六六頁。
- (39) 相原良一『天保八年 米船モリソン号渡来の研究』(野人社、昭和二十九年十一月)、一四頁。
- (40) 同右、二七頁。
- (41) 注(39)の二七頁。
- (42) *The Chinese Repository*, from May 1837 to April 1838, Canton. Printed for the proprietor, 1838, p. 211
- (43) *Rev. George B. Stevens, D. D & Rev. W. Fisher Markwick, D. D : The Life, Letters, and Journals of the Rev. and Hon. Peter Parker, M. D. Missionary, Physician, and Diplomatist*, SR Scholarly Resources Inc, Reprint edition, U. S. A. 1972, p. 146
- (44) 注(42)の三五六頁。
- (45) 田保橋潔「モリソン号来航及撃攘に就いて」(『史学雑誌』第三十三編第一号所収、大正11・1)、五一頁。
- (46) 同右、一四六頁。
- (47) 注(45)の五二頁。
- (48) 注(45)におなじ。
- (49) 注(42)の三〇二頁。
- (50) 注(43)の一四九頁。
- (51) Frederick Wells Williams : *The Life and Letters of Samuel Wells Williams, LL. D. Missionary, Diplomatist, Sinologue*, G. P. Putnam's Sons, The Knickerbocker press, New York & London, 1889, p. 96
- (52) 『勝海舟全集 4—開国起原IV』(勁草書房、昭和五十五年六月)。
- (53) 内閣文庫(国立公文書館蔵)。
- (54) 注(45)の五二頁。
- (55) 注(42)の三七九頁。
- (56) 注(42)の三八〇頁。

- (57) 注(43)の二六〇頁。
- (58) 石井民司編『漂流奇談全集』(博文館、明治三十三年七月)、八六九〜八七〇頁。
- (59) 注(51)の九九頁。
- (60) 荒川秀俊編『異国漂流記集』(気象研究所、昭和三十七年七月)、一九五〜一九六頁。
- (61) *The Treaty Ports of China and Japan*, Tühner and Co, London, 1867, p. 216
- (62) 沖田一『日本と上海』(大陸新報社、昭和十六年十二月)、五二〜五三頁。
- (63) “Arrival of the British Squadron at Japan” *The Illustrated London News* (Jan. 13, 1855) 所収。
- (64) 『文久二年上海日記』(全国書房、昭和二十一年五月)、七頁。
- (65) 注(62)の七〇頁。
- (66) 石井研堂編『異国漂流奇談集』(福永書店、昭和二年六月)、五一四頁。
- (67) 船艦門不開港場繫船「英国軍艦将マテーソン初テ浦賀及下田ニ渡来一件 二」(『統通信全覧 類輯之部 二八』所収、雄松堂出版、昭和六十二年二月)に音吉のこの人相書がみられる。
- (68) W. G. Beasley: *Great Britain and the Opening of Japan 1834-1858*, Luzact Company LTD, London, 1951, p. 116
- (69) キャサリン・ブラマー『最初にアメリカを見た日本人』(日本放送出版協会、平成元年十月)、一四三頁。
- (70) 『大日本古文書 幕末外国関係文書之七』(史料編纂掛、大正四年八月)、一三五〜一三六頁。
- (71) 注(62)の五九〜六〇頁。
- (72) 『遣外使節日記纂輯 第三』(日本史籍協会、昭和五年一月)、一八〜一九頁。
- (73) 注(20)の二九頁を参照。なお、シンガポールにある音吉の記録名の原綴はつぎのとおりである。  
M. Ottoson's naturalization record 1864, Bukit Timah Road Old Christian Cemetery, Register of Burials in the Singapore Christian Cemetery [the National Archives of Singapore 蔵]。
- (74) 重久篤太郎「ベッテルハイム訳稿本の復刻」(『新教』一九七九年冬季号所収)。

## ロンドンの公文書館にある宝順丸の三漂流民に関する史料

鎖国時代にイギリスを訪れた日本人の資料をあさっていたとき、尾佐竹猛編『明治文化研究論叢』（一元社、昭和9・4）に収められた、奥平武彦の「英国政府と日本漂流民」と題する小論（二二頁～二六頁）を見いだし、それをひじょうに興味をもって読んだ記憶がある。

奥平論文は、ロンドンの公文書館にある史料を用いて、宝順丸の三漂流民（音吉、久吉、岩吉）について研究した最初のものである。奥平によると、公文書館でイギリス外務省の文書綴をみていたとき、漂流民みずからが書き記した書類を含む、一件の記録をたまたま目にしたという。

奥平は、偶目した日本漂流民についての記録を四点、請求番号とともに紹介した。

天保四年（一八三三）十月か十一月ごろ、アメリカ北西部——ワシントン州オリンピック半島のフラタリイ岬の海岸に漂着した日本人は、イギリス毛皮会社の社員によって救助され、のちその送還がイギリス政府と日本との外交交渉の端緒として利用されたあげく、「モリソン号事件」を惹起し、さらに幕府は異国船打払令（文政八年）を撤回し、撫恤令（文化三年）へ復する糸ぐちとなった。

奥平論文の中で、わたしがいちばん興味をおぼえた点は、一八三五年（天保六年）の夏、日本人三名がロンドンのチームズ川上の船のなかで十日ばかり過したのち、一日だけ上陸をゆるされ、案内人とともにロンドン見物をした、といった箇所と、のちにマカオにおいて世話になるギョッパ師の求めに応じて筆をとった日本文字であった。

奥平はイギリスにある日本漂流民の史料の存在を示したのが、原文をも含む関連史料のすべてを明示したわけではない。わたしは他日、イギリスを訪れる機会があれば、それらの文書を実見し、ぜひその写真複写を手に入れたいと思っていた。が、先年の夏、資料あつめにロンドンを訪れたのを機に、宝順丸の日本漂流民に関する未紹介のコピーをも入手することができた。

鎖国下、日本漂流民の多くは母国の土をふたたび踏むことを許されず、ほとんどの者がふるさとに思いをはせながら、異国に骨をうずめねばならなかった。つぎに掲げるものは、外国人によるありのままの日本人に関する記録である。はじめに原文を示し、そのあと

訳文（大意）を添えた。

〔資料 一〕 この資料の紹介は、おそろしく本稿が最初でもあらう。三漂流民の帰国への強い願望を伝えている。

“Copy”

Macao, 15<sup>th</sup>, January 1836.

Sir,

We have had the honor of receiving your letter of yesterday's date, relative to the three Japanese now at Macao. We have jointly interrogated them, both in English and also in their own language so far as a slight knowledge there of already acquired by one of us was adequate to do so.

They unhesitating express their desire to return to their own country in any way; and in an English, in preference to a Chinese vessel. With regard to the description of vessel, whether one of His Majesty's Ships, or a Merchantman, they are unable to make an election.

Their own desire is to remain at Macao until

To Sir G. B. Robinson Bart. —  
&c. &c. &c.  
the favorable season.

They seem to entertain no apprehension whatever of any harm to themselves from the jealousy of their government. But this may probably arise from their ignorance since the infrequency of visits to Yeddo by foreign vessels and the extreme youth of two of them at the time they were driven off the coast of their own country render it unlikely that they

“オットソン”と呼ばれた日本漂流民

should be aware of any danger to which they may possibly be exposed.

We are not disposed to think from my information we possess that danger will accrue to them from being conducted to their own country in an English vessel more than in a vessel of any other country China not excepted. At the same time we are aware of an instance, two or three years back of a party of Japanese who had been wrecked on the coast of Luzon being sent to Macao and (at their own request, we believe) handed over to the Chinese Government.

In this case, however, the lives of the Merchants and supercargo of the vessel having been saved, they were able to procure for themselves a passage home which we are doubtful if the Chinese Government would have the generosity to give to needy Mariners.

The present Sovereign of Japan is, we understand, a man of a more liberal and enlightened policy than the generality of his country men,—such, at least, was the account given of him, when crown prince by Colonel Stuerler who was twice sent a few years since as Envoy from the Dutch Government to the Japanese court.

It appears to us that the most eligible conveyance for them to their own country would be one of His Majesty's Ships the—commander of which should be furnished with a letter from the Governor General or other high Authority stating the—circumstances which have thrown them upon the protection of the English and warmly recommending them to the paternal kindness of their own Government.

We have the honor to be

Sir,

Your most obedient servants

(Signed) J. R. Morrison.

" C. Gutzlaff.

True Copy

Edward Elinslie

Secretary Treasurer. /

[編纂 11]

Translation

Ewa Kitche, Oto Kitche, Kew Kitche, formerly in the Third year of Ten po (the name of the present reign) on board the Hajunomar, Captain Toogem, a vessel belonging to the harbour of Tabaoorah in the district of Bisyou (B (.....) port of his Japanese Majesty) having a crew of 14 men; — are not at all afraid so go on board a British Man of war to Japan

Signed

Ewa Kitche

Kew Kitche

Oto Kitche

Ch Gutzlaff

Chinese Joint= [.....]

Macao January 16

True Copy

1836

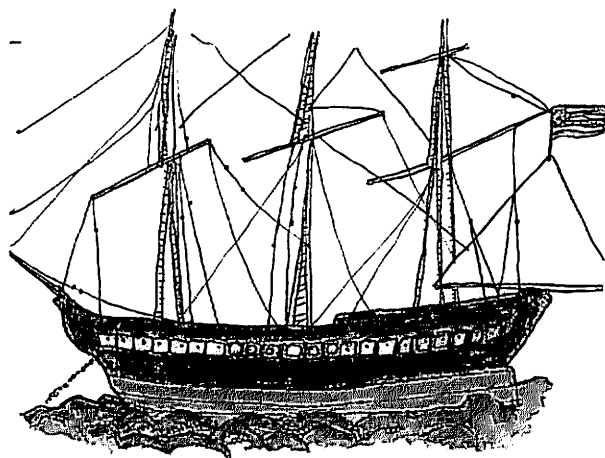
/ Edward Elinslie

Secretary Treasurer

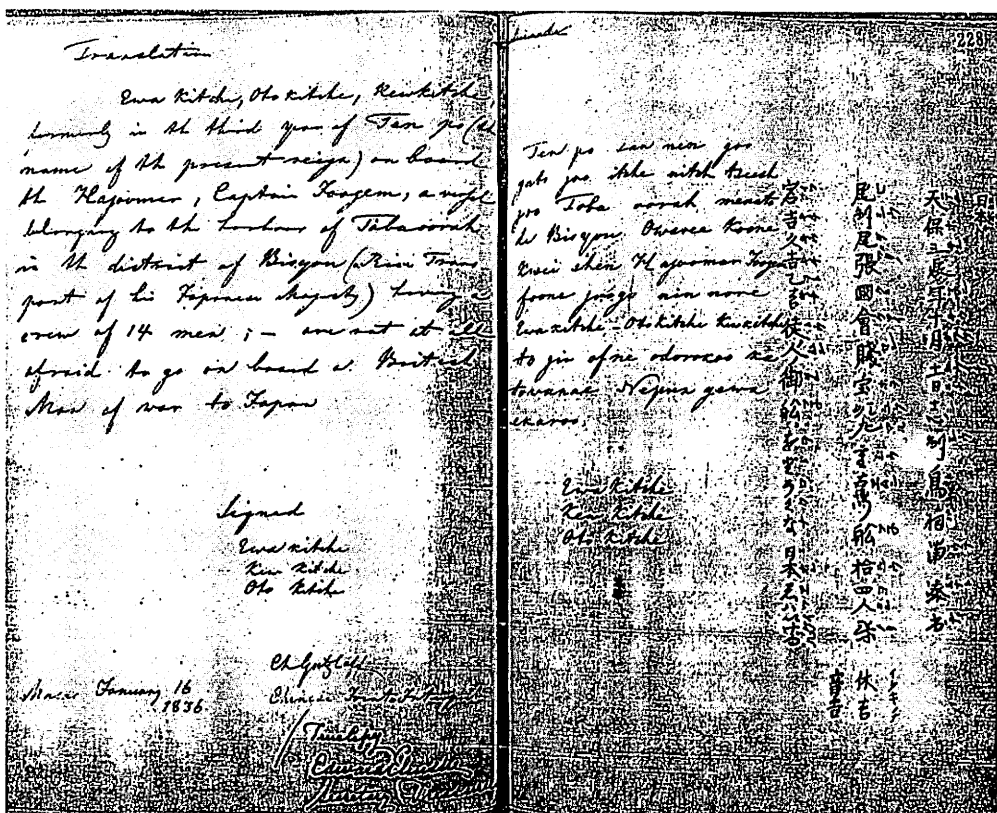
Ten po San nen joo gats joo  
 itche mitch Aseesh joo Toba oorah  
 menato de Bisyou Owares Koone  
 Kwei Shen Hajuomar Toogem founé  
 joogo nin nore Ewakitch-Otokitché  
 Kewkitché to jin ofne odorokoo <sup>ka</sup>  
 towanae Nepur yewa ekaroo

Ewa kitche  
 Kew kitche  
 Oto kitche

岩吉久吉乙吉徒ノ人ノ御船ニをどろくな日本ゑはいける	尾州尾張國會賤宝順丸重右衛門船捨四人乗	天保三辰年十月十一日志州鳥羽浦湊出	日本
イワキチ	イワキチ	イワキチ	イワキチ
休吉	休吉	休吉	休吉
音吉	音吉	音吉	音吉



天保八年（一八三七）六月二十八日に浦賀に渡来したモリソン号  
[筆者によるスケッチ]



ロンドンの公文書館にある宝順丸の三漂流民（岩吉、休吉、音吉）らの署名および日本文学。



〔資料 三〕 日本人三名のアメリカ漂着から、ロンドンを経てマカオに至るまでの顛末を逐一伝えたギュムラフ師の報告書。全文の紹介はおそらく本稿が最初であろう。

Macao 28<sup>th</sup> March 1836.

Sir,

I have the pleasure of submitting to you a detailed account of the adventures of Ewa. Kitché, Kew Kitché and Oto Kitché, the three shipwrecked Japanese Mariners, as they related them to me.

We embarked Nov. 20<sup>th</sup> 1831, fourteen in number on board the Hojoumar Captain Jouyemondano, a vessel of about 180 tons burden, freighted with the annual tribute sent by the prince of Owari to Temps Tenkasama the present Emperor of Japan.

Our cargo consisted of rice, planks, —mats, silk and cotton piece goods, vinegar, liquors & c. The harbour of Bisjou in Owari district from whence we sailed bears east.

Sir C. B. Robinson Bart

from Yeddo the port to which we were bound and with a favorable wind the voyage may be accomplished within two days. It blowing very strong the next day, we, entered the harbour of Shi Shou where we remained twelve days at anchor. A heavy gale arose when we had left this port during which both our masts as well as rudder were carried away and to save ourselves we threw part of our cargo over board.

From that time we gave ourselves up to despair and continued floating about at the mercy of wind and waves for 14 months. Unhappily we had only 5 small casks of water on board and as this was very soon used, we suffered terribly

literally entertained for about four months. We received clothing and every thing we wanted, and were then sent on board the Royal to London. She was about seven months on her voyage. Both the Captain as well as the whole crew treated us most generously, and gave us an additional stock of clothes. Ten days we remained on board the vessel in the Thames. Before we departed we were allowed to spend a whole day on shore, and accompanied by a guide, to view the great city. After being sent on board the General Palmer, where we were, all treated and badly fed, we arrived after a voyage of six months at London. This is their own account of their journey of three months.

下線部は、三人の日本人がロンドン見物をしたことを記した箇所をしめす。

from thirst. Often have we been obliged to cook our rice in spirits which rather increased our thirst.

Whenever it rained we caught all the water we possibly could, but though the supply was often large it did not last long; until another shower filled our reservoir we had therefore to wait patiently.

When the weather was fine we caught plenty of fish which constituted our daily food.

Two months after <sup>to add to</sup> our misfortune the scurvy began to make its appearance and all our companions

gradually died of this horrible disease. Their feet were swollen, the abdomen as much inflated as that of a hydropical patient and the extremities of the body were literally rotten before they breathed their last.

The vessel was at the same time leaky and it required our utmost exertions to keep her afloat. After the months of keen sufferings when our number had been reduced to three, we came finally in sight of land. Two days we tried to get nearer in shore on the morning of the third we found ourselves amongst rocks, the vessel soon struck upon a large rock and went immediately to pieces, whilst we saved ourselves upon some of the planks which were floating about.

When reaching the shore we found ourselves in the power of the Indians who had come to collect the fragments of the wreck and stripped us of all our clothes. The weather was very cold and our only covering consisted of a rag which some good natured Indians had given us.

We were then dragged to an Indian village about five miles from the shore, which consisted of 14 log houses, each

inhabited by about one hundred individuals. The cold being very intense and snow driven through the roof, we spent here seven months in misery.

Our daily food consisted in dried fish, which were baked between hot stoves and torn assunder with the teeth. The Indians frequently threatened to kill us and at other times they treated us with the greatest indignity. Once we attempted to escape from their clutches but were brought back in triumph. Our bed was the bare soil around the fire which was constantly kept burning.

In spring an English Brig came in the roads and the Indians permitted us to go on board of her. She took us up the river Columbia to the English Fur factory where we were most liberally entertained for about four months. We received clothing and every thing we wanted and were then sent on board the *Eagle* to London.

She was about seven months on her voyage. Both the Captain as well as the whole crew treated us most generously and gave us an additional stock of clothes.

Ten days we remained on board the vessel in the Thames. Before we departed we were allowed to spend a whole day on shore and accompanied by a guide to view the great city.

After being sent on board the General Palmer where we were ill treated and badly fed, we arrived after a voyage of six months at Shintin.

This is their own account. An acquaintance of three months has in some degree made me acquainted with their character and I have never detected them in saying anything which was untrue.

I remain,

Sir,

Yours respectfully

Signed. Chas. Gutzlaff

/ True Copy

Edward Elmslie

Secretary Treasurer

[複製 図]

Duplicate

This is to certify that I have received from the Treasurer to the Superintendents the sum of fifteen Spanish dollars  
for the support of the three Japanese from 23<sup>rd</sup> December to 23<sup>rd</sup> January 1837.

\$ 15.00

Joint Interpreter

Ch Gutzlaff

Macao 23<sup>rd</sup> January 1837.

[續表 五]

Expenditure for the Japanese from the 23<sup>rd</sup> January to 23<sup>rd</sup> February 1837

\$

Board..... 15.00

Shoes and Sundries ..... 3.00

\$ 18.00

Charles Gutzlaff

Joint Interpreter

Macao 23<sup>rd</sup> February 1837.

[資料 六]

Duplicate

This is to certify that I have received from the Treasurer to the Superintendents the sum of sixteen Spanish Dollars for the support & c. of the three Japanese from 23<sup>rd</sup> February to 23<sup>rd</sup> March 1837.

\$ 16. —

Charles Gutzlaff

Joint Interpreter.

Macao 23<sup>rd</sup> March 1837.

[領事 印]

Duplicate

This is to certify that I have expended for the three Japanese from the 23<sup>rd</sup> March to 23<sup>rd</sup> May

for Board..... \$ 30.00

for Sundries ..... 3.00

\$ 33.00

Joint Interpreter

Charles Gutzlaff

Macao 23<sup>rd</sup> May 1837

【資料 八】

..... Duplicate

His Britannic Majesty's Superintendents  
To J. P. de Souza, Apothecary D<sup>r</sup>

1837

Jany 14 = To Medicines supplied to person in the chief Superintendent's Establishment and the Japanese according to  
To our prescription from 1<sup>st</sup> January to 30<sup>th</sup>  
June 30<sup>th</sup> =  
June 1837 inclusive Spanish Dollars 50.15

Macao

30<sup>th</sup> June 1837.

Received payment  
P. de Souza.

Accounts duly examined and found correct. [.....]

【資料 九】

..... Duplicate

I hereby certify to have received for Mr. Gutzlaff during his absence the sum of fifty two Spanish Dollars for the support & c of the three Japanese.

\$ 52 [.....]

Chinese Secretary & Interpreter

Macao July 1837.

[資料 一]の大意。

“写し”

拝啓

いまマカオにいる三人の日本人に関して、昨日付の書簡を落手したことを光栄におもいます。わたしたちは、英語または日本語を用いて共同で三人の日本人を尋問いたしました。わたしたちのうち一人は、すでに日本語を多少識っていたので、どうやら問いただすことができました。

三人は何らためらうことなく、いまずぐにも国に帰りたい、といった希望を述べています。中国船で帰国するより、イギリス船がよいというのです。船の種類についていえば、わが女王陛下の艦もしくは商船にせよ、三人はじぶんで選ぶわけにはゆきません。

かれらの願いとは、航海にとってつごうのよい季節まで、マカオに滞在することなのです。三人の日本人は、日本政府が焼きもちを焼くことによって、わが身に危害が加えられることを恐れてはいないようです。しかし、不安を覚えないのは、おそらく無知に起因し

一八三六年一月一五日 マカオにて



ているからでしょう。なぜなら外国船はめったに江戸を訪れることはないし、三人のうちの二人は、日本の海岸の沖に吹き流されたと  
き、ひじょうに若かったために、ひっとしたら遭遇するかも知れない危険についてわかっていないのです。

わたしたちは、すでに得ておる情報から、中国の船を含む他の国の船よりも、イギリス船で日本へ連れ帰ったとしたら、日本人の身  
に起るかも知れない何らかの危険について考えたくないのです。

と同時にわたしたちは、ある事例について知っておりますが、それは二、三年前のこと、ルソン島の海岸で難波した日本人の一行が、  
マカオに送られて来、（かれらの希望によるものと思われませんが）中国政府に引きわたされたのです。

しかし、この場合、商人や積荷監督人（船頭のことか――引用者）の生命は無事でした。かれらは故国に帰ることができました。中  
国政府が救いを求めている日本人水夫らを寛大に扱ったかどうか分かりませんが。

いまの日本の統治者は、大多数の日本人よりも開明的であり、心の広い人物とみられているようです。数年前にストウエラー大佐が、  
皇太子の命によりオランダ政府の使節として、日本の宮殿に二度も派遣されたとき、日本皇帝についての説明は、せいぜいこのような  
ものでした。

日本人を本国に送還するのにいちばんふさわしい輸送手段は、女王陛下の軍艦でしょう。指揮官は総督またはその筋からの書簡をた  
ずさえる必要があります。文面は日本人をイギリスの保護下に置いた事情をのべたもので、日本政府の温情を切望するものです。

敬具

汝の忠実なるしもべ

J・R・モリソン 署名

C・ギュッラフ

真正の写し

エドワード・エインズリイ

出納局長

「資料 二」の大意。

訳文

岩吉、音吉、休吉らは、いまを去る天保三年（いまの治世の名称）に宝順丸に乗り組みました。同船は（船頭の名は、トーゲムとい、乗組員は十四名）尾州（日本皇帝の港）地域の鳥羽浦に属しておりました。これら三名は、イギリスの軍艦に乗って日本へむかうことに、いささかの懸念も抱いておりません。

岩吉

休吉 署名

音吉

チャールズ・ギユッラフ

中国語の共同通訳

一八三六年一月一六日 マカオにて

真正の写し

エドワード・エインズリイ

出納局長

テンボ	サンネンジュガツ	ジュイチミツ	シジュ	トバウラ	メナト	デ	ビシュ	オワレ	クネ	クウエイシエ
ン	ハジュオマル	トーゲム	フネ	ジュゴネン	ノレ	エワキチ	オトキチ	キュキチ	トジンオフネ	オド
ロク	カ <sup>マ</sup>	トワナエ	ネフルエワ	エカル						

イワキチ

休吉

音吉

〔資料 三〕の大意。

一八三六年三月二十八日 マカオにて

岩吉、休吉、音吉らのくわしい冒険談を貴殿に提出することは喜びでもあります。この三人は日本の漂流民であり、その冒険談を語ってくれました。

わたしたち十四名は、一八三二年十一月二十日船頭重右衛門殿の宝順丸に乗組みました。これは一八〇トン積みの船であり、日本のいまの皇帝である天下様に届ける尾張侯の年貢を積んでおりました。

わたしたちの積荷は、米・厚板・畳・絹や綿製品・酢・酒などでした。出帆した尾張のビジュ港は、目的地である江戸にある港の東に位置しておりました。風向きさえよければ、二日の旅なのです。

出帆した翌日、大風が吹いたので志州（鳥羽）の浦に入港し、そこに十二日間滞泊いたしました。港を出てから大暴風雨にあい、帆柱やかじを失いました。わたしたちはわが身を救わんがために、積荷の一部を海にすてました。

その後、身は絶望にゆだね、風浪のなすまま洋上を十四ヵ月もただよいました。運のわるいことに、船に積んでいたのは五たる分の飲料水だけでした。そしてこの飲み水は、またたく間に使ってしまった。わたしたちはどの乾きに、たいそう苦しみました。たびたび日本酒を用いて米をたかねばならず、そのために余計のどが乾きました。

雨がふるといつでもできるだけ雨水をたくわえましたが、需要が多いために長くは持ちませんでした。だから再び雨が降って水が一杯になるまで、じっと待たねばなりませんでした。

天気がよいとき、魚をいっぱい捕えましたが、それが日々の食糧になりました。二ヵ月ほど経つと、わたしたちの不幸に輪をかける

ように、壊血病が現れるようになり、仲間はこの恐ろしい病氣のためにしだいに死んで行きました。足は腫れあがり、腹は水症にかかった病人のようにふくらみ、手足は息を引きとるまえにじっさい腐っていました。

船はそのころ水が漏るようになっていたので、沈まないようにするのにたいそう苦労いたしました。長い月日、苦しみにうめいたころ、仲間は三人になっておりました。そのときついに陸地が目に入ったのです。

わたしたちは、二日のあいだ陸に近づこうといたしました。そして三日目の朝、岩と岩との間にたどり着きましたが、やがて船は大きな岩とぶちあたったために直ちにこなごなになってしまいました。一方、わたしたちは浮いていた厚板につかまり助かることができました。

岸にたどり着いたとき、インディアンにつかまってしまいました。かれらは難破船の破片をあつめにやって来た者たちでした。わたしたちは身ぐるみはぎとられてしまいました。陽気はひじょうに寒いときであり、身につけるものといえば、ぼろ切れ一つだけでした。それをくれたのは、人のよいインディアンたちでした。

その後、わたしたちは、海岸から五マイルほど離れた所にある、インディアンの部落へ連れてゆかれました。その部落は、十四の丸太小屋からなり、各棟に百名ほどが暮らしていました。寒さはひじょうにきびしく、雪によって屋根が打ち抜かれることがありました。わたしたちはこの部落で、七ヵ月間悲惨な生活を送りました。

毎日の食物といえば、魚の干物ひものであり、それをかまどで焼き、歯で食いちぎって口にしました。インディアンたちからは、しょっちゅう殺すぞ、とおどされました。そうでないときは、ひどい侮辱をうけました。いちどかれらの手中から逃げ出そうとしましたが、部落に連れもどされました。わたしたちの寢床は、いろりばたの敷物のない地面でした。いろりの火は一晚中、もえておりました。

春になると、イギリスのブリグ型帆船（二本マストで横帆を装備——引用者）が停泊地にやってまいりました。インディアンたちの許可をもらって、その船に乗ることができました。わたしたちは船とともにコロンビア川をさかのぼり、「イギリス毛皮工場」にたどりつきました。ここで四ヵ月ほど寛大な扱いをうけました。

衣服のほか、欲するものは何でもあたえられ、のちイーグル号に乗せられ、ロンドンにむかいました。イーグル号の航海は、七ヵ月

ほどつづきました。わたしたちは船長をはじめ、乗組員全員からじつに寛大な扱いをうけ、取りおきの衣服をまたもらいました。

十日のあいだ、わたしたちはチームズ川に浮ぶイーグル号にいました。出帆する前に、丸一日上陸することを許され、案内人に伴なわれてロンドンを見学いたしました。

ジェネラル・パーマー号に移乗させられてからは冷遇され、食物もじゅうぶん与えられませんでした。六カ月ほど航海してから、  
伶<sup>シンティン</sup>仃に到着いたしました。

いままで述べて来たものは、かれらの口から出た談話です。三カ月ほどつき合ってみた結果、三人の人柄もあるていど判かるようになります。けっして偽りを申しでないことを知りました。

敬具

チャールズ・ギュッラフ

真正な写し

エドワード・エルムズリイ

出納局長

〔資料 四〕の大意。

写し

本状によって、財務長官から、一八三六年十二月二十三日より一八三七年一月二十三日までの日本人三名の扶養料としてメキシコドルで十五ドル受理したことを証明いたします。

十五ドル

共同通訳

チャールズ・ギュッラフ

一八三七年一月二十三日　マカオにて

〔資料　五〕の大意。

（前文略）

一八三七年二月二十三日

一八三六年一月二十三日より一八三七年二月二十三日までの日本人三名の扶養料として、チャールズ・ギュッラフへ十八ドル支給す。  
（領収書Cをみよ）

エドワード・エインズリイ

出納局長

一八三六年一月二十三日から一八三七年二月二十三日までの間に、日本人のために使った費用。

まかない……………十五ドル

靴および雑品……………三ドル

計

十八ドル

チャールズ・ギュッラフ

共同通訳

一八三七年二月二十三日　マカオにて

「資料 六」の大意。

写し

本状によって、財務長官から、一八三六年二月二十三日より一八三七年三月二十三日までの間に日本人三名の扶養料として、メキシコドルで十六ドル受理したことを証明いたします。

十六ドル

チャールズ・ギュッラフ

共同通訳

一八三七年三月二十三日      マカオにて

「資料 七」の大意。

写し

本状によって、一八三六年三月二十三日から一八三七年五月二十三日の間に、日本人三名のために、

まかない……………三十ドル

雑品……………三ドル

計

三十三ドル

を使ったことを証明いたします。

共同通訳

チャールズ・ギュッラフ

一八三七年五月二十三日　マカオにて

〔資料　八〕の大意。

写し

女王陛下の局長

J・P・デ・ソーザ

薬剤師　薬学博士

一八三七年一月十四日から同年六月三十日の間に、監督正の施設の者にあたえられた医薬品およびわれわれの処方に従って、一八三六年一月一日から一八三七年六月三十日までの間に、日本人にあたえられた医薬品の代金計五十ドル十五セント。

受領

P・デ・ソーザ

一八三七年六月三十日　マカオにて

会計の監査をおこない、誤りはなかった。

〔……〕

〔資料　九〕の大意。

写し



本状によって、ギュッラフ氏の不在中に、日本人三名の扶養料および雑費として、メキシコドルで五十二ドル受けとったことを証明いたします。

五十二ドル

「……」

中国人秘書兼通訳

一八三七年七月　マカオにて

注「……」内は判読不能。

“オットソン”と呼ばれた日本漂流民



宝順丸の乗組員の墓がある愛知県  
知多郡美浜町小野浦の「良参寺」  
〔筆者撮影〕



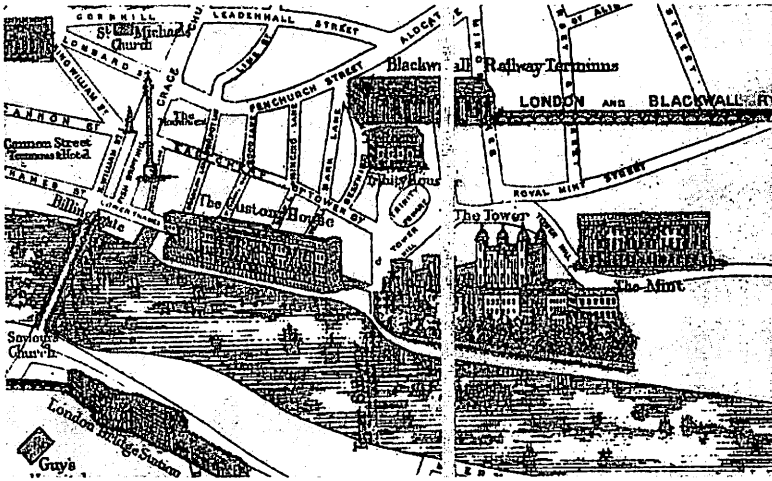
現在の美浜町の海岸



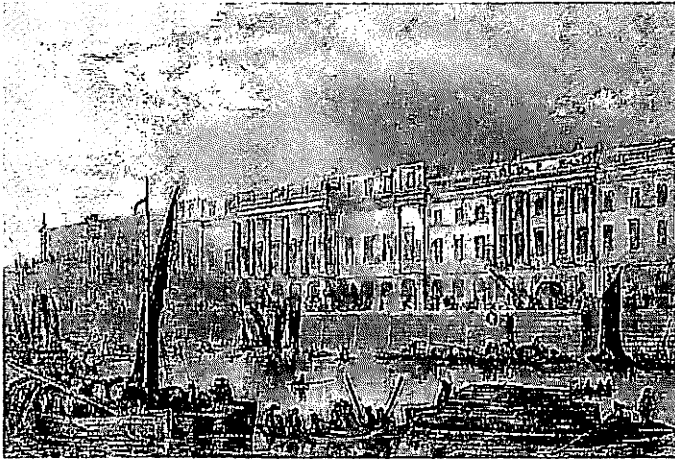
良参寺の裏手にある宝須丸乗組員の墓。(左側)  
〔筆者撮影〕



良参寺墓地 (右側)



19 世紀のロンドンの絵地図  
Illustrated Map of London, C. Smith & Son [刊行年不詳] より。

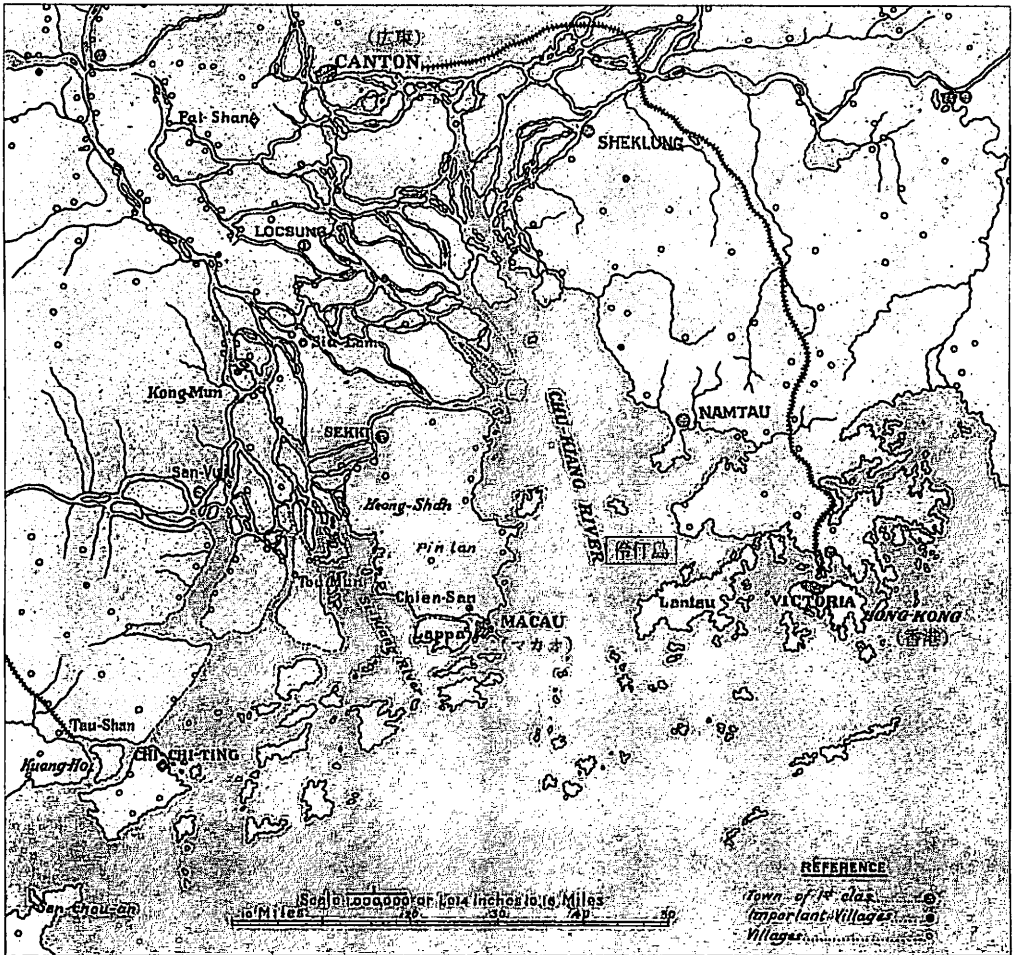


19 世紀の税関前の風景。  
[筆者蔵の銅版画より]

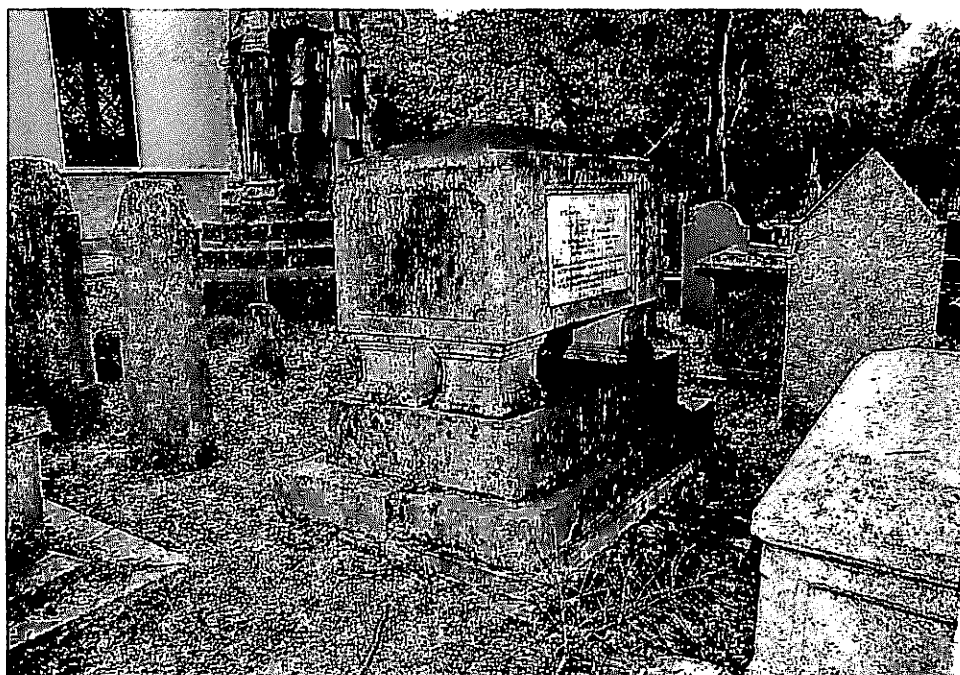


19 世紀のロンドンのテームズ川風景。中央の建物はセントポール寺院。  
[筆者蔵の銅版画より]

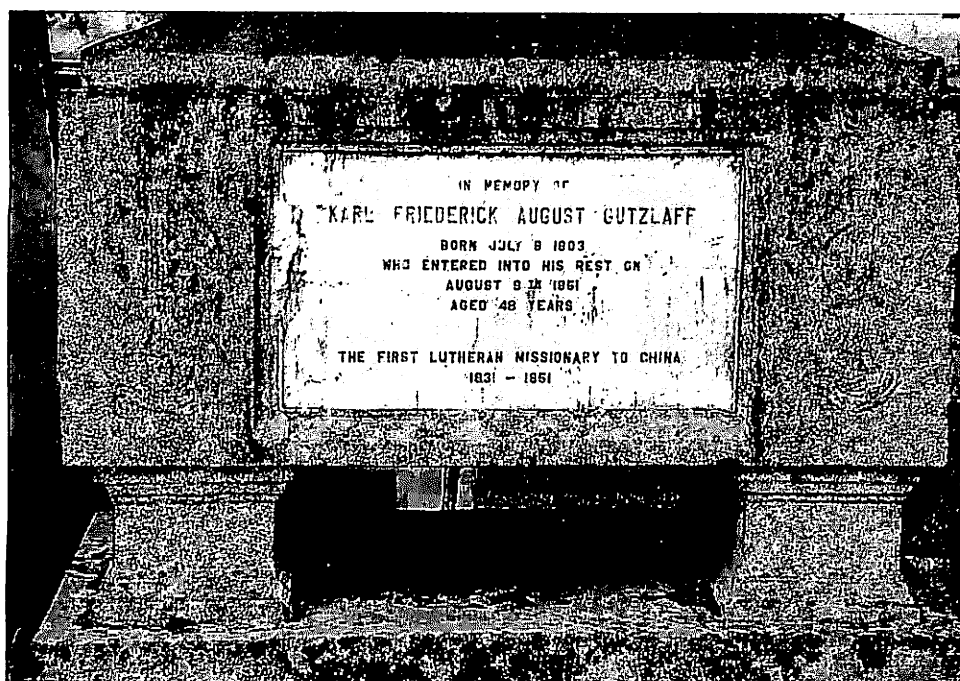
## “オットソン”と呼ばれた日本漂流民



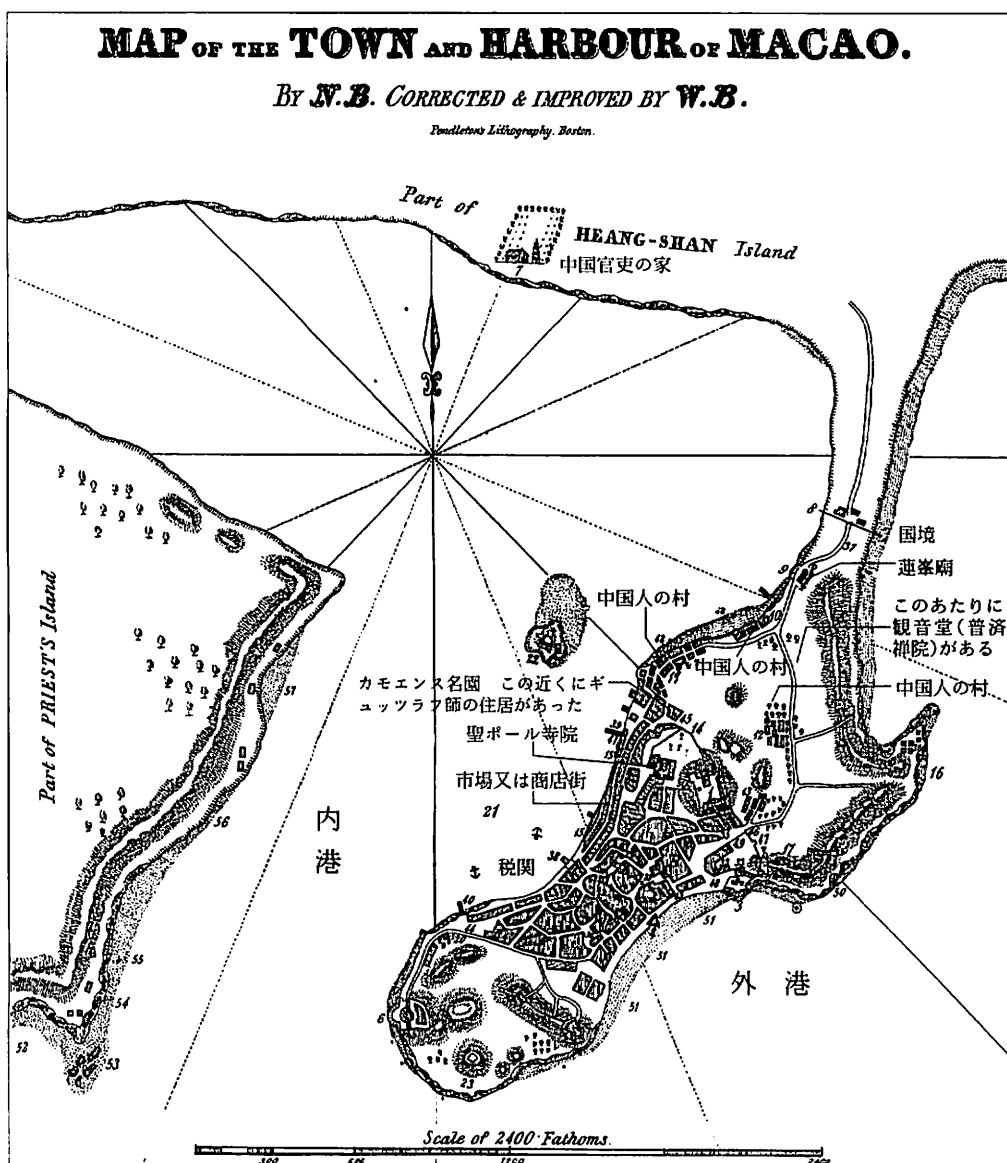
《香港およびマカオの地図》



「香港墳場」(Hong Kong Cemetery, 香港島の Happy Valley に位置) の入口近くにあるカルル・ギュッラフ師の墓。[筆者撮影]



上に同じ。

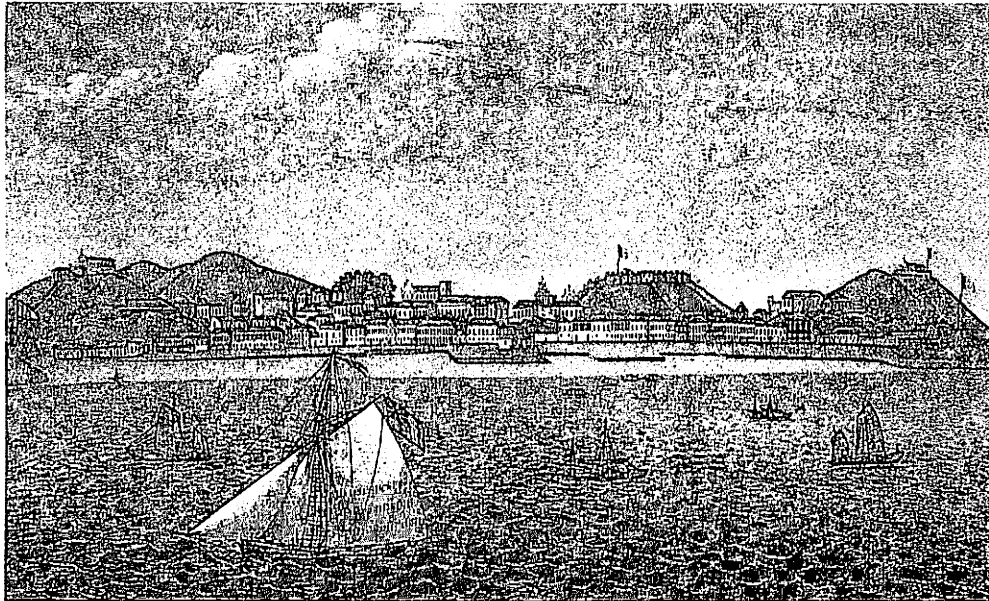


1830年代のマカオの地図

Andrew Ljungstedt: *An Historical Sketch of the Portuguese Settlements in China*, James Munroe & Co, Boston, 1836 より。



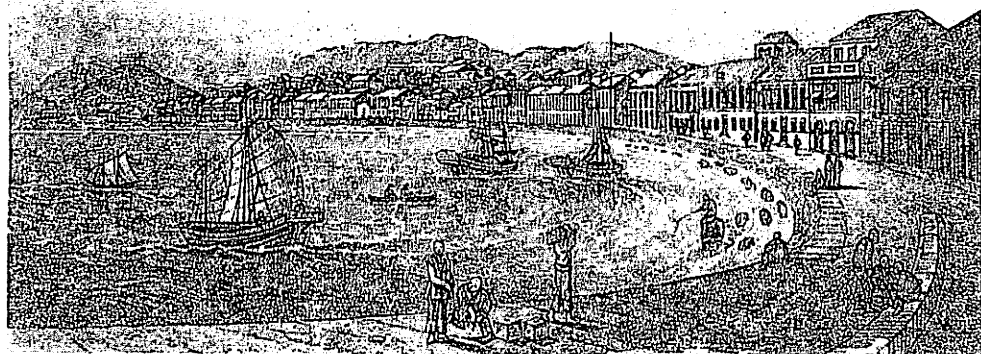
ペニャの丘から見た 19 世紀のマカオの全景。



VIEW OF THE GREAT LANDING BEACH "PRAYA GRANDE" AT MACAO.

19 世紀のマカオのパノラマ図。

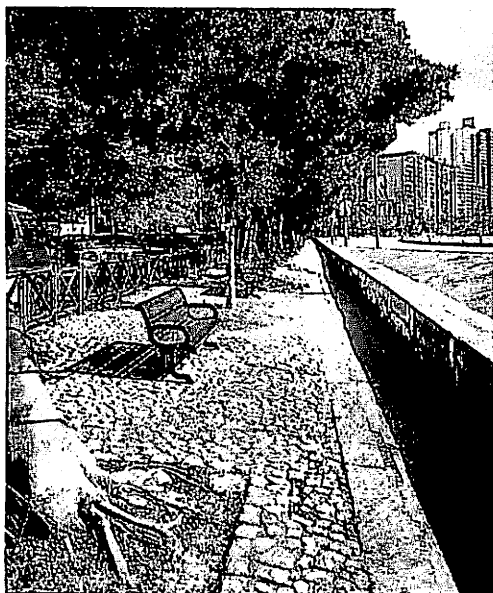
Andrew Ljungstedt: *An Historical Sketch of the Portuguese Settlements in China*, James Munroe & Co, Boston, 1836 より。



19 世紀のマカオの図。

Rev. George Smith: *A Narrative of an Exploratory Visit to each of the Consular Cities of China, and to the Islands of Hong Kong and Chusan*, J. Nisbet and Co, London, 1847 より。





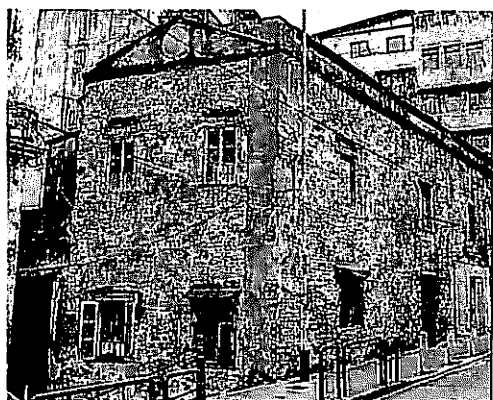
マカオの民国大馬路あたりの風景。石垣は昔の防波堤をしめす。



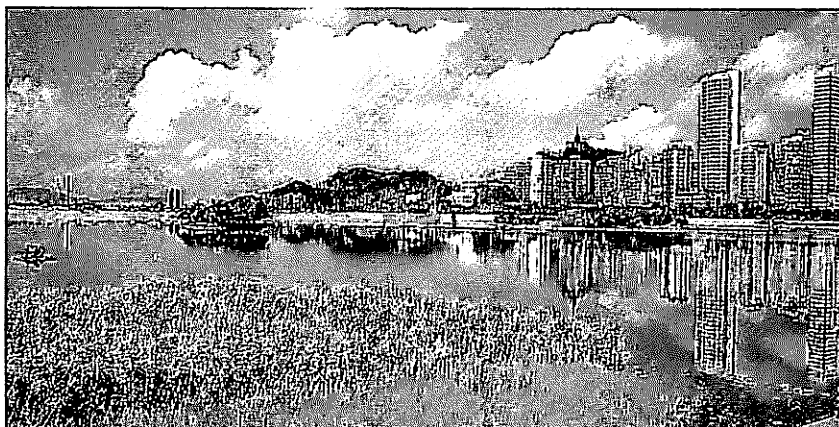
マカオの民国大馬路にある植民地時代の番小屋。



サウン・ホセ教会の近くにある昔の家。

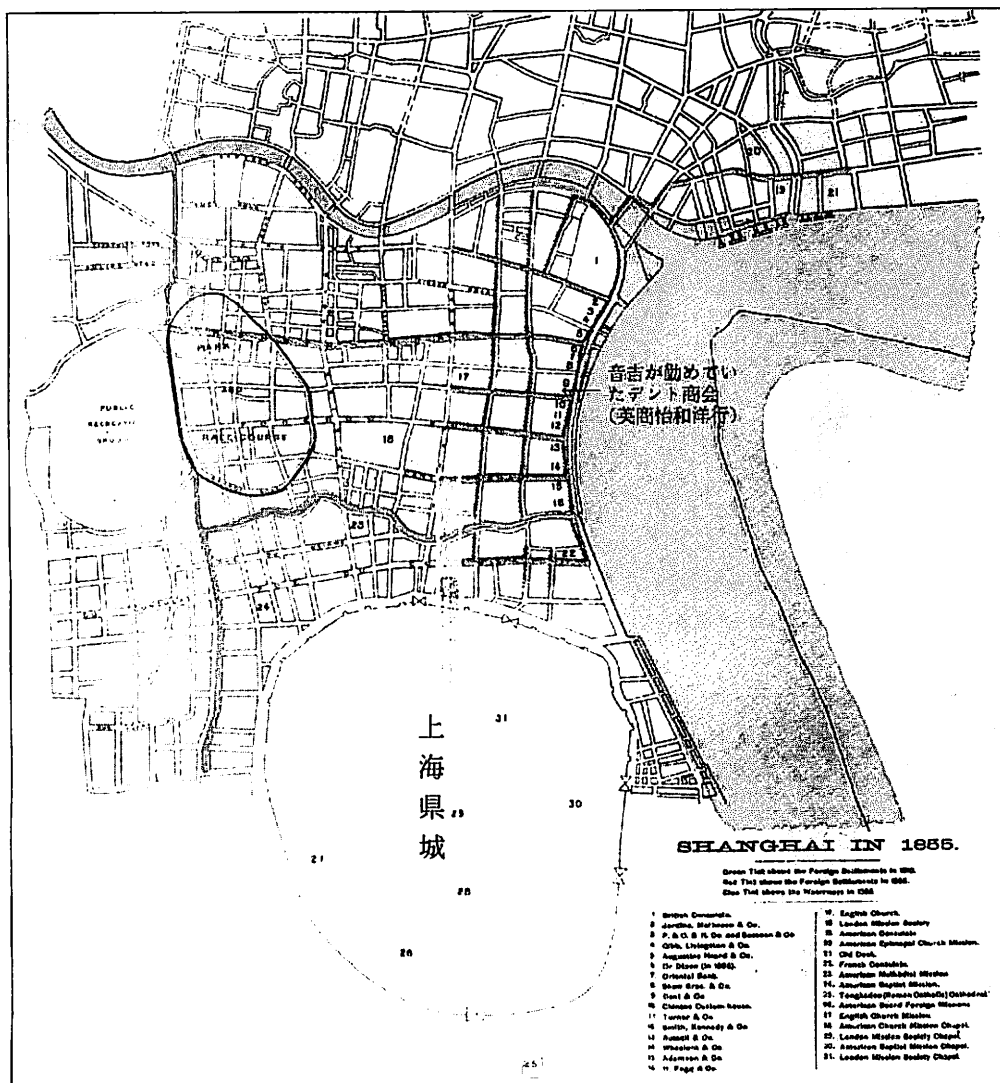


マカオの聖ポール天主堂跡近くの昔の家。



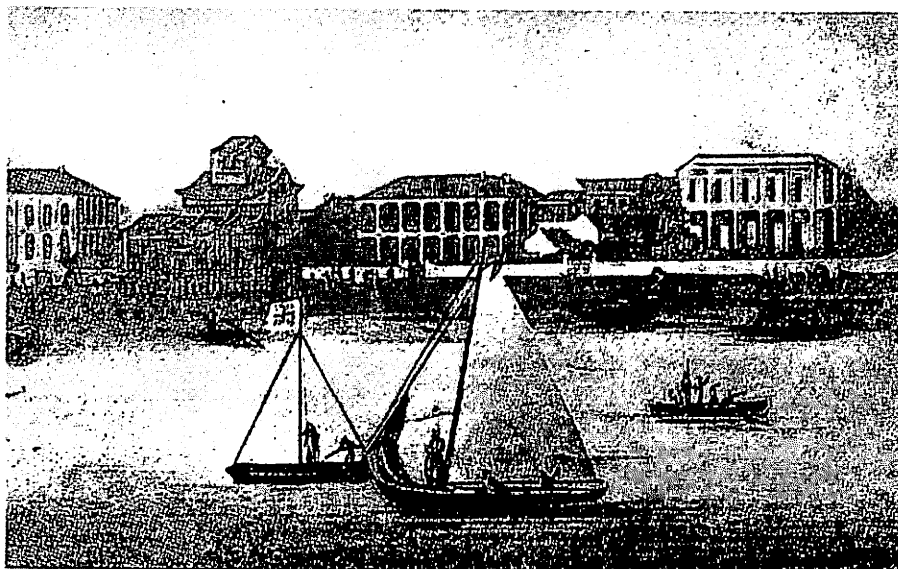
マカオの民国大馬路あたりのいまの風景。  
[筆者撮影]



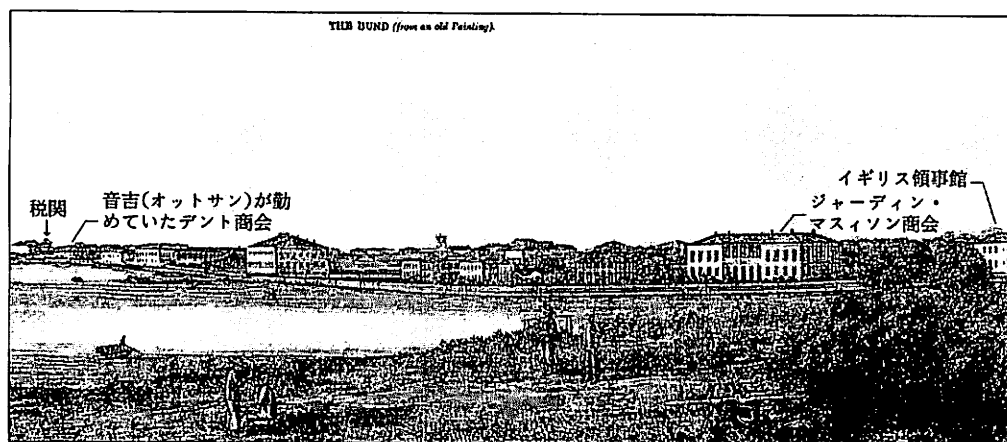


《1855 年当時の上海地図》

“オットソン”と呼ばれた日本漂流民

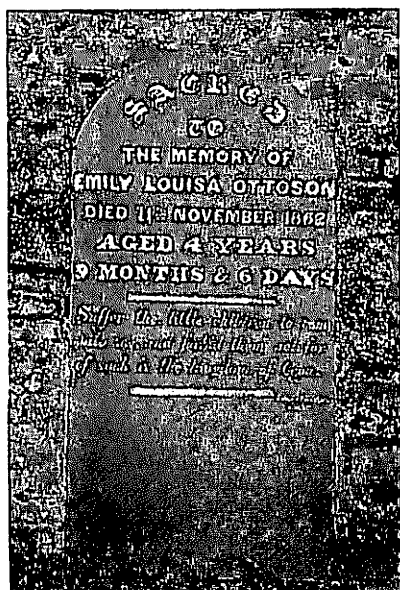


中央のベランダ付の家は、音吉（オットサン）が勤めていたデント商会。その左側の建物は税関。この図は1853年ごろのもの。



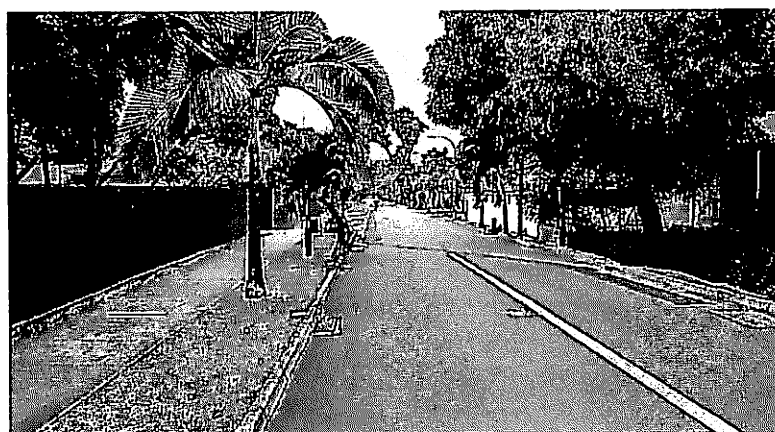
19世紀の上海の河岸通り（バンド）。

G. Lanning & S. Couling: *The History of Shanghai*, 1921より。



シンガポールのフォート・カニング公園 (Fort Caning Park, 街の中心に位置) の石垣にはめ込まれたエミリー・ルイザ・オットソン (音吉の娘?) の墓石。[筆者撮影]

右に同じ。



音吉が家族と暮らしたいまのシグラップ (Siglap) 地区のアーサー街 (Arthur's Road)。このあたりはいまも高級住宅地。[筆者撮影]

*Episcopalian* 1867 John Matthew  
*Division* 226. *Protestant* 19 January *Ottoson*

*Small Protestant* *Arthur's* *Protestant* *Handwritten*  
*Siglap*

音吉こと John Matthew Ottoson の埋葬記録。[the National Archives of Singapore 蔵]

## A Japanese Castaway called “Ottoson”

While Japan closed the country, no Japanese ship was allowed to sail into the open sea for trade. The scope of trade activity was exclusively limited to coastal trade within the country. One large Japanese ship in the Edo period was called “Sengokubune”, which means it can take in one thousand *koku* of straw rice bags. The merchant ships navigated mainly along the coast but they were not constructed to withstand stormy weather. Overtaken by tempests they were at times wrecked, or tossed about at the mercy of the waves, ending cast ashore in a foreign country.

Even if the crew escaped death, what awaited them was hardship. The Japanese government (i.e. the Tokugawa Shōgunate) prescribed a strict punishment for the returnees from abroad, so that some of the survivors were seized with fear of death.

Otokichi (音吉の *alias* “Ottoson”) was one of the castaways who abandoned all hope of returning home as he was unwelcome by the Japanese officials. As a result he found himself worth living, helping fellow countrymen who experienced hardship as castaways.

This essay deals with Otokichi's checkered life. He was a sailor of the ship named “Hōjunmaru” (宝順丸) of Onoura (i. e. nowadays Mihamacho in the Chita peninsula), which sailed from Nagoya to Edo (i. e. Tokyo) on the 20 th of November of the 3 rd of Tempo (i. e. 11 Dec. 1832). This ship carried large quantities of straw rice bags of the Owari clan as well as other articles.

While voyaging, she was overtaken by turbulent weather, so she stopped and stayed at Tobaura (鳥羽浦, a sea town located at the Eastern end of Mie prefecture), for 12 days in hope that the weather would improve. Later the Hōjunmaru left Tobaura for Edo, however, she encountered a storm again, finally losing a steering wheel and a sole mast. Since then the dismasted ship began to drift in the Pacific Ocean.

It was in October or November of the 4<sup>th</sup> year of Tempō (i. e. Nov. or Dec. 1833) that the ship was finally driven to Cape Flattery located in the North west of Olympic peninsula, near Washington, U. S. A, after drifting for 14 months.

While drifting, 14 seamen of the ship were able to prolong their lives by eating rice and drinking rain water. However 11 out of 14 men died of scurvy. Three men survived, namely Otokichi (16), Hisakichi (17) and Iwakichi (30).

When the three men returned to shore, they were captured by the Red Indians. These Japanese were compelled to live as slaves in the Indian village for about 7 months. Luckily the Japanese captives were found and rescued by Cap. William MacNeil, the skipper of the merchant ship "Lama" which belonged to the Hudson Bay Company.

The three Japanese stayed at the fur factory of the company for about 4 months. It was in August of the 5<sup>th</sup> of Tempō (i. e. Sep. 1834) that the Japanese were taken to Fort Vancouver where they were placed under patronage of Dr. John Mcrolin, the general manager of the Hudson Bay Company.

In about November of the same year (i. e. Dec. 1834), the three Japanese went on board the Eagle, a brig, and sailed from Fort Vancouver for London, dropping at the Sandwich Islands on the way and then proceeded to England via Cape Horn.

Most likely the Eagle arrived at the port of London on the 13 th of May 1835 and left London for Macao on the 28 th of the same month. While the ship was at anchor on the Thames, the three Japanese were interned on the ship for about 10 days. But prior to departure they were allowed to land to see the sights of London with their guide. They were the first Japanese who had ever been sightseeing in the Great City.

It's probable that these men were transferred to the General Palmer en route to Macao. The ship arrived in the Macao roads, Lintien Island (伶仃島), in December 1835. Cap. Downs of the General Pamer next consigned them to George Best Robinson, the Secretary of the English Board of Trade, requesting for the return of the Japanese to their homes. So G. B. Robinson sent the Japanese to Macao leaving them in the care of Rev. C. F. A. Gützlaff, a Chinese interpreter who worked for the English Board of Trade.

Captain Eliott, an Undersecretary of the Board of Trade, served in Macao. He examined these men in person and was firmly convinced that they were Japanese citizens after showing them the Japanese map made by Kurusenstern. Captain Eliott suggested that the three Japanese should be sent to Japan by H. M. ship with utmost care and friendship.

Shortly the Japanese sailors began to live with the family of Mr Gützlaff. The latter began to translate the Gospel of St. John and the letters written by him into Japanese, asking for close cooperation of the three travelers. It took him about a year to complete the translations which were later printed in Singapore.

Not much is known about the lives of these Japanese in Macao, but it is understood that they become Christians and attended divine services on Sundays. When a year and a few months passed, four more Japanese castaways from Kyūshu Island were sent to Macao from Manila, escorted by the Spanish authorities. They were also placed under the protection of Mr.

Gützlaff.

Though the British representative was not so eager to send the Japanese seamen back to their homes, Oliphant Company, based in Canton formed a plan to repatriate them. The company saw the return of these men as a good opportunity for opening communication with Japan. Moved by the mercantile and missionary purposes, the American firm in Macao fitted out the brig "Morisson" (564 t.) specifically for that purpose, in which the seven Japanese, Mr. and Mrs. King, Dr. Parker, a missionary physician, and Rev. S. Wells Williams, and afterwards a Chinese interpreter to Commodor Perry's squadron took on board and set sail for Japan.

The Morrison left Macao for Japan on the 3rd of July 1837 and at Naha, Ryūkyū Island (i. e. Okinawa), where the vessel touched, Mr. Gützlaff also joined the Japanese expedition.

On the 30th of July, 1837, the Morisson arrived in the offing of Uraga, Edo Bay. Having anchored some 2 km, from the shore, the ship was soon visited by a number of Japanese boats. Some 200 curious locals visited the Morisson and were entertained with sweet wine and light meals. Wine was not popular among them, but white bread caught the public fancy.

Contrary to the crew's great expectations, the Morisson was suddenly bombarded on the following morning by the canons, suffering damages on the port side. So Captain Ingersoll made up his mind to leave Uraga for the time being. The unexpected attack caused deep grief to the returnees. Two out of the seven ship wrecked men on board held grudges against the bad treatment of the authorities, and expressed their determination to forsake their mother country.

The Morisson, for the purpose of a second trial, entered the Bay of Kagoshima, Kyūshū Island, in the principality of Satsuma, on the 12th of

August, however the ship was once again bombarded in the same manner as in Uraga. Thereafter the Morisson returned to Macao on the 29 th of August without great results.

Later the 7 Japanese parted the company, living in various places in China. Iwakichi moved to Ningpo where he married a Chinese woman, however, he was killed by her former husband. Hisakichi moved to Hong Kong where he worked for the British Board of Trade. In 1852 he resigned his post and moved to Shanghai.

In regard to Otokichi, he left Macao in about 1848 or 1849 for Shanghai, where he worked for Dent & Co.,. He was called “Ottoson” by his colleagues. He got married to a Malay woman with whom he had 2 sons and a daughter. During his stay in Shanghai, he visited Japan twice, on board British warships as a interpreter. In May 1849, he was aboard H. M. S. “Mariner” commanded by Commodore Mattheson, with official duties of surveying.

When Otokichi met with the Japanese officials on the deck, he assumed a false name of “Lin a duo” (林阿多) preserving his safety. His conduct as well as his good Japanese ability gave rise to suspicion. When he was questioned about his native place, he responded that he was born and brought up in Shanghai. He also said that he learned Japanese from his late father who visited Nagasaki 15 times in his life time.

On 7 th of September, 1854, Otokichi visited Nagasaki as an interpreter on board H. M. S. “Winchester”, commanded by James Stering. On this occasion he told his life story without concealment to the Japanese officials.

On the first of February, 1862, Otokichi and his family left Shanghai for Singapore, avoiding the disturbances of the Taiping Rebellion. In Singapore he ran a freight office and lived in comfort. In the 1860 s whenever the Japanese mission dropped at this British colony, Otokichi went and met with



his fellow country men, pining for home.

On the 20 th of December, 1864, Otokichi (John Matthew Ottoson) became a naturalized citizen of (country). Also, he was baptized at a Presbyterian Church shortly afterward. He died of hemophile in January 1867, aged 50, at Arthur's Road, Siglap (i. e. residential quarter) and was buried on the 19 th of January, 1867 at the Christian Cemetery, Bukit Timah Road. The cemetery was later destroyed and a hospital now stands in it's place.

It seems that the only reminder of Otokichi is the gravestone of Emily Louisa Ottoson (died at 4 years and 9 months) at Fort Caning Park, but whether she was the daughter of Otokichi is not yet confirmed.

My grateful thanks are due to the Public Record Office in London, the National Library, the National Archives in Singapore, the Central Library in Hong Kong and Arquivo Histórico in Macao for permission to consult and copy releant documents. Thanks are also dne to Mr. Henry Leong (Record management officer), Mr. Hazlan Abu Samah (Archives reference assit.) at the National Archives in Singapore, Ms. Alawia Ahmad (Técnico auxilian) at Arquivo Histórico in Macao for providing assistance during my research in these cities.

20 th September 2003  
Prof. Takashi Miyanaga